

42254

教科書文庫

4
810
42-1928
200030/845

30-107

Kodak Gray Scale



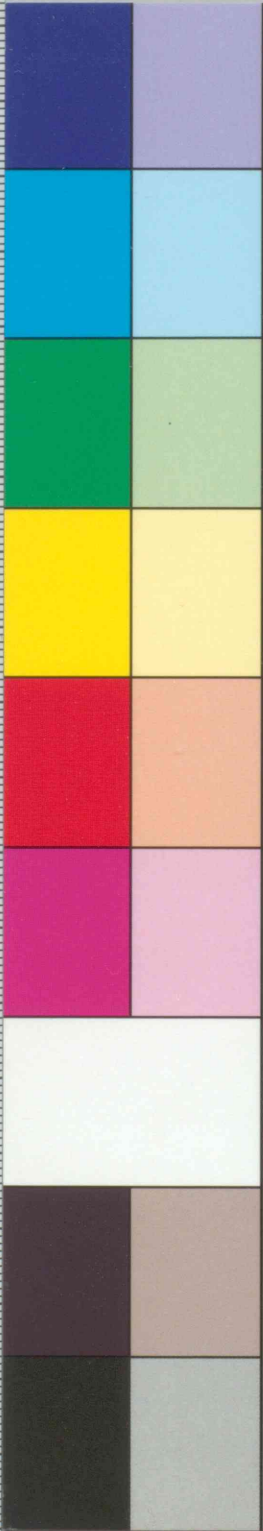
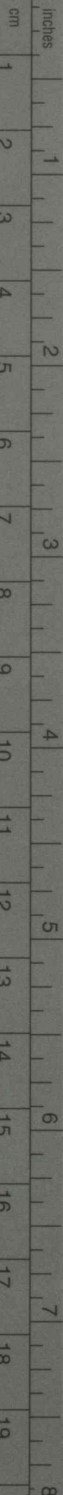
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
To11  
資料室

新制  
女子國語讀本  
第三修正版  
卷四





文部省檢定  
高等女子學校國語科用

資料室

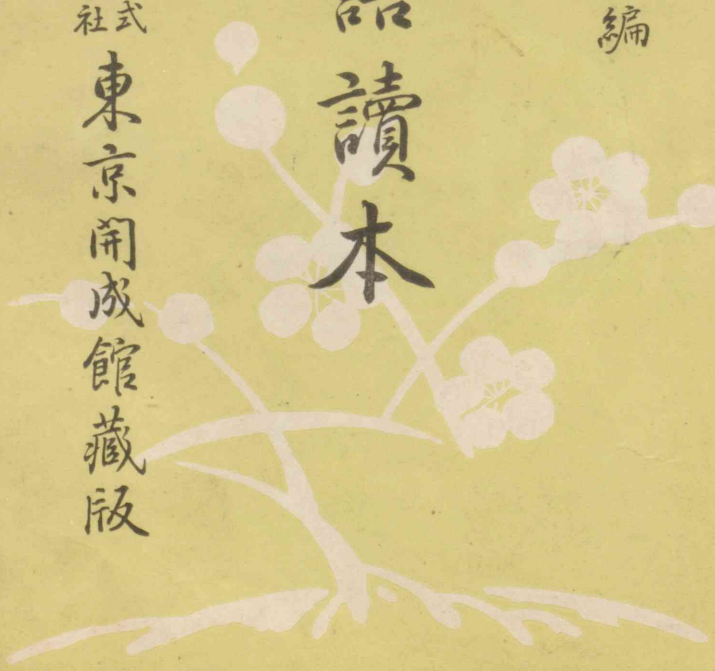
375.9  
T011

東京開成館編輯所編

新制  
女子國語讀本

株式會社

東京開成館藏版



第二學年

石川喜美枝

石川喜美枝



廣島大學圖書印

広島大学  
教  
30404  
圖書



(筆齋龍湖橋法) 子羽追



パリー  
母のかが

夕イマートウ

ヨスコートウ

新制女子國語讀本 第二修正版 卷四

目次

一	皇太后陛下の御事	一
二	日章旗(詩)	中西悟堂
三	初秋日記	沼波瓊音
四	月見に人を招く(候文)	大塚楠緒子
五	果物の趣味	正岡子規
六	柿二つ(自修文)	高濱虚子

目次



七 我が家の富……………徳富健次郎…五

八 宮島にて(詩)……………有本芳水…五

九 百合と玉瀾……………(國文)…四

一〇 お母さん……………島村民藏…五

一一 詩歌の極致……………佐々木信綱…五

一二 文章雑話(自修文)……………島崎藤村…五

一三 現代歌人の和歌(和歌)……………七

一四 我が袖の記……………高山樗牛…五

一五 徳川光友の室……………熊田葦城…五

一六 二宮翁夜話……………福住正兄…五

一七 富籤……………矢田挿雲…八

一八 伊吹山(自修文)……………近松秋江…五

一九 スキーの面白味……………九

二〇 スキーマン(詩)……………井上康文…四

二一 正月……………三宅やす子…四

二二 ポンペイ物語……………濱田青陵…四

二三 發明界の偉人……………三

二四 明治天皇の御製(和歌)……………三

二五 人のために盡す心……………安井哲子…三

二六 妹安藝子(自修文)……………朝吹磯子…三



二七 殿中の刃傷……………村上浪六…二四

二八 勇ましい朝(詩)……………千家元麿…二五

二九 菅公夫人……………山田新一郎…二五

三〇 子供と其の父(自修文)……………武者小路實篤…二六

三一 南船北馬(口語書簡文)……………津輕照子…二七

三二 春……………加藤武雄…二七

三三 平和は成れり……………近衛文麿…二八

新制女子國語讀本

第二修正版 卷四



一 皇太后陛下の御事

\*皇太后陛下が古來稀に見る聰明なお方でいらせられることは、今更事新しく述べるまでもない。私達はこの陛下を國母として戴いて居るのを、無上の光榮と申うて居る。

大正十二年の夏、皇太后陛下は先帝陛下と共に日光御用邸に御滞在中であつたが、宮内省から九月一日の關東地方大震火災の情報を受けさせられて、一方ならず御憂慮あそば

皇太后陛下  
御名は節子、  
明治十七年御  
誕生。

先帝陛下  
大正天皇。



され、同月二十五日、後藤内相が御用邸に伺候して、帝都に於ける災禍の様相及び罹災者の状態などを詳細に言上したところ、陛下には御熱心に御傾聴なされて後、自分等も一汁一菜で凌ぐゆゑ、國民も節約を旨とし、殊にその向きくの官吏は徹底的に罹災者の救護に努め、帝都の復興に盡力して貰ひたい。といふ意味のお言葉を賜はつたので、内相も陛下の御仁慈の深いのに感激して退去したといふ。

さて皇太后陛下には、同月二十九日、俄に焦土と化した帝都に還啓なさる旨を仰出され、バラック建の假上野驛に御到着あそばされるや、直ちに上野公園自治館内の罹災者を御慰問なされ、なほ宮内省巡回病院、三井慈善病院にも行啓な

後藤内相  
名は新平、  
手縣の安岩  
政四年生、  
爵、貴族院議  
員。



(下陸后皇時當) 下陸后太皇の中間慰御者難避

されて、親しく傷病者を御慰問あそばされた。そして、翌三十日及び十月二日には、陸軍第一衛戍病院、慶應病院、赤十字病院、青山病院、傳染病研究所、濟生會病院、東京帝國大學病院等に行啓あそばされ、傷病者に優渥なお言葉を賜はつた。その御仁慈のほど、光明皇后の古い例も偲び出されて、まことに有難い次第

光明皇后  
聖武天皇の  
后、悲田、施  
兩院を設け、  
飢病の徒を救  
恤なされた。  
天寶四年、  
御年六十。







おほとのを叩く霰の音にしも、

假屋のよるの寒さをぞ思ふ。

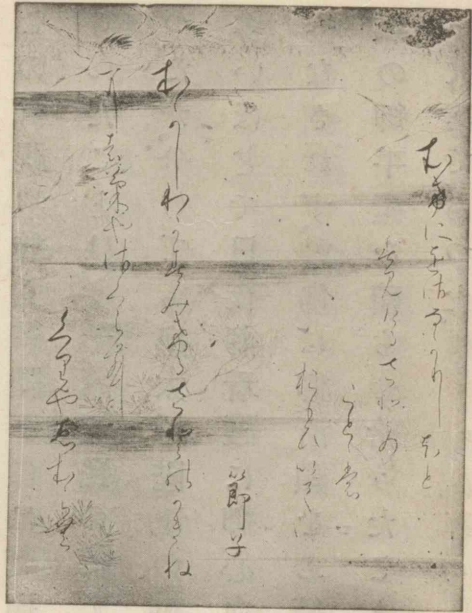
これは、霰が御所の屋根を打つ音が聞える、震火災のために家を失つて、粗末なバラックに住んでゐる人達は、定めて寒さに震へてゐるであらう、氣の毒なことであると、罹災者に対する御憐愍の御情を詠ませられたのである。

陛下には、去る大正十四年五月十日を以て、御成婚満二十五年に當らせられたので、銀婚の御祝典をお舉げあそばされた。折柄御病氣中の先帝陛下にも、沼津御用邸から宮城に還幸あそばされ、各皇族殿下をお召しになつて、御内儀に御祝宴を催させられたことは、實に慶賀に堪へない次第であ

つた。併し、このお目出たい御祝典に際しても、皇太后陛下には諸事御節約を旨とせられ、一般國民の献上品をお斷りになつて、眞心だけで澤山である。と仰せられたのは、眞に恐懼の至りであつた。

この御祝典後、先帝陛下には御病氣が次第にお悪くならせられたことは、七千萬國民の等しく御憂慮申上げた所であつたが、分けても皇太后陛下の御心勞は拜察するさへ恐れ多いほどで、日夜御看護に御心血をお注ぎになり、御安眠さへなされず、神佛に御祈願をお籠めになつて、ひたすら御病氣の御平癒を禱らせ給うたことは、たゞ感涙の外はない次第であつた。





皇太后陛下御筆蹟

大節祝祭日に於ける宮中三殿の御參拜はいふに及ばず、新年歌御會始を始め、觀櫻觀菊の御會、赤十字社並に愛國婦人會の總會、女子學習院の卒業式にも必ず出御あそばされ、その都度有難い思召を傳へさせられた。

かやうに皇太后陛下は、先帝陛下の御看護にお心をお盡しなされたが、そのお暇には、外國使臣に謁見を賜はり、天機奉伺の文武大官にも拜謁を仰せつけられた。三

むなげにをさ  
なかりしほ  
どすみけと  
さとのこと  
いとおもひ  
みかしのす  
かきねはす  
みやまむく  
りやさむら

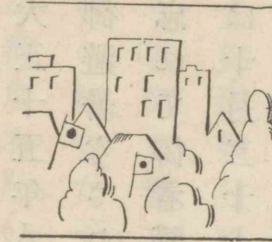
大正十五年八月十日、皇太后陛下は葉山御用邸西附屬邸に御避暑なされ、引續きそこに御滞在の中、先帝陛下を、寢食を忘れて御看護あそばされた。それにも係らず、先帝陛下には十月二十七日頃から御病氣が次第に重らせられ、十二月十七八日頃になつて御容體が急變し、重態に陥らせられた。皇太后陛下には、御痛はしくもこの長い間、寸時の御心安めもなされず、畏くも早朝から深更まで、先帝陛下の御病床近くに常侍あそばされて、お心の限りを盡して御看護なされ、殊に御急變後は、御躬ら先帝陛下の御胸御額のあたりを幾度か純白のガ<sup>カ</sup>ーゼ<sup>イ</sup>に氷を浸してお冷しになり、絶えず天顔をお見守りあそばされて、御眉一つのお動きにも、お心をお

ガーゼ  
ドイツ語。



碎きなされたと承るさへ、實に恐懼感泣の極みである。皇太后陛下のお心盡しの甲斐もなく、先帝陛下には、その二十五日午前一時二十五分、七千萬國民の身も世もあらぬ悲痛の裡に、哀しくも崩御あそばされた。我等は皇太后陛下の御胸中を拜察して、殆ど言ふ所を知らないのである。

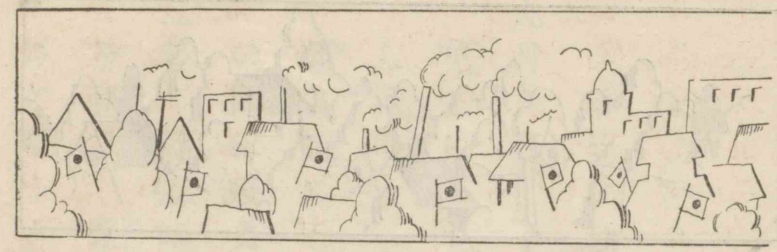
二 日章旗



秋日の朝の町を私は行く、  
日章旗のひるがへる町を、  
晴れやかなしい祝日の町を、  
私は心爽かに歩いて行く。

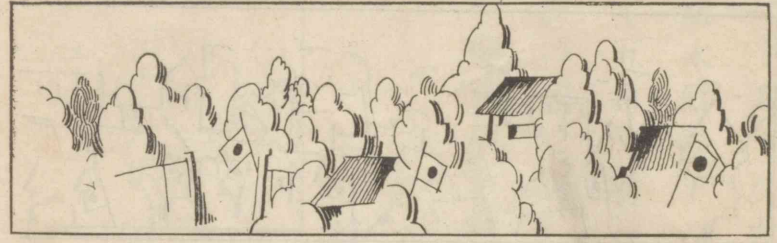
中西悟堂

中西悟堂  
金澤市の人、  
明治二十八年  
生、詩人。



日章旗の何といふ純潔さ、  
何といふ明朗さ、  
私は祝日の国旗の美しさに心奪はれて、  
意氣揚々として町を歩く。  
町並のうしろに靡く青空、  
青空にひるがへる日章旗、  
何といふ博大な心を示し、  
何といふ光明な心を表してゐるのだらう。  
あゝ、晴れやかに麗しく、  
日章旗は町にひるがへる、  
りうくと流れる朝風にひるがへる。





私は日章旗が語る心を始めて知った。  
 その光輝に心を奪はれ、  
 その單純さ正しさに心を奪はれ、  
 嬉々として爽かに、  
 朝の町を歩いて行く。  
 光榮の旗よ。  
 譽の國旗よ。  
 あゝ、樹々の綠と青空と、  
 明るい人々等の顔々と、  
 燦然たる日章旗とに飾られた祝日の町を、  
 感動に溢れ〜て、

私は颯爽と歩いて行く。(現代日本詩選)

三 初秋日記

沼波 瓊音

九月一日。子等皆久しぶりに學校に行く。兒童の通學を  
 見るに至つて市街蘇る。ヨシガキ一高<sup>\*</sup>大學の學生の姿もちらほ  
 ら見ゆ。  
 圖書館にして、十時頃休憩室に入り、ふと空を見れば、片雲  
 の間に殘月なほあり。  
 二日。朝五時にしてなほや、暗し。東天のかの美しき雲  
 を見よ。暈桃色したるが、昇らんとする日を逆さまに受  
 けて、やう〜に輝き來る。屋根の瓦、露にしとり、家を繞

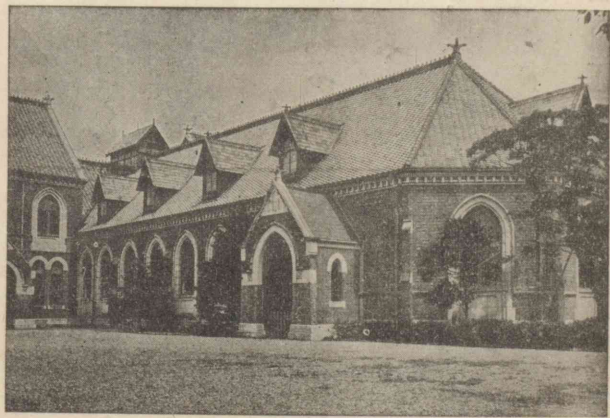
沼波瓊音 名は武夫、名古屋市の人、一、年、昭和二十一年、年五十一、一、高、第一高等學、校、大學、東京帝國大、學、圖書館、同、大學圖書、館。



りて悉く蟲の音なり。  
櫻の葉は土用の中より黄ばみて  
落ち初むるものなるが、哀れに見  
え初むるはこの頃よりなり。溝  
際の礫の上に散り布きて、朝日受  
けたる、最も嬉し。

圖書館に至れば、暫く見ざりし富  
士山、藍色の肩を露はしたり。日  
漸く高うしてまた見えぬ。

今日風強し。木の葉頻りに落つ。館の避雷針の横に鳥  
二羽あり。風に向ひ、羽をそよがせ、首を垂れて啼く。



館書圖學大國帝京東の前災火震大正大



音 瓊 波 沼

休憩室に入る。そこなるソファの上に、壁に向ひて坐し  
て眠れる人あり。この人嘗てこのソファの上にて此方  
に向き、洋服にて端坐し、手を拱き、瞑目して寂然たりしこ  
とあり。面白き人なり。年四  
十四五歳、瘦軀にして膚黄に、頭  
髮淋しく薄れ、面常に笑を帯ぶ。  
席には必ず唐本あり。  
この頃、日々館前の砂利の上に  
曝書をなす。紙の翻るを砂利もて鎮したり。  
風いよく強し。公孫樹の並木皆聲あり。雀、礫の如く  
飛ぶ。歸りて始めて今日の二百十日なるを知る。



對馬の人告別に來る。明日遙かに郷里に歸り行かんとてなり。新秋の山海三百里、羨しきかな。

花開かずなりしより垣際に遠ざけたる朝顔の盆栽、葉の黄ばみたる、そこゝに見えて淋し。

軒端の芙蓉、寶珠の如き緑の蕾は見えながら、未だ花瓣を現すに至らず。

大粒の雨はらくと芙蓉の葉を打つ。池暗く、金魚動かず。夕暮近く俄に西の空晴る。富士の見ゆるを子等珍しがる。長女曰く、あゝ分つた。富士山の上の平べつたいは、上が天へはいつてるからだ。少時にして、富士の彼方に雲簇りて金色に輝く。此方より見れば、この雲恰

も山の縁を取りたるが如くなるが、漸くこなたおもてに備ひ來るや、雲もて描きたる富士の如し。奇ならざるに似て甚だ奇なり。

忽然として厠の窓より夕陽射る。家も樹も皆暗き黄色に燻り、庭の梧桐の葉日に透きて、その色初冬の霜に遇へるに異ならず。茶の間の向ふの障子また黄に照りて、そこなる電燈光なく晒されたり。

つくく法師せはしげに競ひ鳴く。

三日。雨激しく降る。冷やかなり。新しく貼りし障子そこゝに立てたり。部屋に物蔭出來ていと懐かし。

四日。障子しめきりて、なほ寒し。華氏六十八度なり。



五日。すこし晴れかゝりたる  
が頓に蒸暑く、障子また外す。  
暮方より雨車軸を流す。雨  
少し小止みになる毎につく  
つく法師鳴きに鳴く。その  
いらくくとせき立ちたる、志  
多くして齡傾きたる人に似  
て哀れなり。

六日。風稍強く、白き雲、水色の  
空をずり行く。三宅坂のあ  
たりに用ありて行く。お濠



三宅坂

三宅坂  
東京市麴町  
區

端の柳、葉の重みに堪へず、散るを待てる風情あり。お濠  
に小波頻りに起りて、お土居に低く枝張れる松の蔭に、鶴  
の如き鳥見ゆ。何鳥にや。  
昨日あたりより、いつも来る納豆屋来らず。今日その時  
刻に、男の不慣れなる聲にて賣り来る。あの女の納豆屋  
臨月らしかりしが、さては今産褥に在りて、夫代りて賣り  
に出でたるならん。皆々あはれがる。  
七日。雨屢来りて而も霽れず。夕暮近くなるまゝに、愈蒸  
暑し。  
赤兒ひとり茶の間の真中にえんこして、頻りに右の手に  
て左の人さし指を握り、もぎ取る形しては、右の手を開き



て見る。もぎ取りたるつもりにて、その指のなきを怪しむさまなり。

沼波瓊音自署

沼波瓊音自署

一女兒學校より歸り來て、洋服のまゝにて遊び居り。母「着物を脱ぎなさい。」といふ。「着物ではない、洋服だよ。」「洋服を脱ぎなさい。」「洋服だけでいゝの。」「シャツはいゝの。」「シャツも脱ぎなさい。」「靴下はいゝの。」「靴下も脱ぎなさい。」「靴下の紐はいゝの。」「靴下の紐を解かずに靴下が脱げますか。紐だけ取らずに居られるなら、さうして見るがいゝ。」兒皆脱ぎ棄て、紐を解きて靴下も取り、さて足に更に紐のみ結びて遊び續く。かくて夜床に入るにも、猶

この紐は取らであり。強情もかうなれば可笑し。

十一日。今日より圖書館始めて夜まであるなり。苦熱の間にかにこの九月十一日を待ちしよ。

朝疾く友人來る。共に百花園に赴く。いつも此處に來



園花百

る秋口の道面白しと思ふ。何となく心の細やかになる頃なればなる雁來紅萩紅蜀葵芙蓉葛花など秋咲く花の咲き競ひて、柔かく慕はしき

百花園 東京市外寺島町(俗に向島といふ)にある。



氣の庭に滿つるに、空こゝより見ればいと低う見えて、白  
き雲飛ぶも人を離れたる様なし。 蟲夜の如く鳴く。  
淺草に寄りて歸る。

それより圖書館に行き、夕方にも歸らで引續き居り。 館  
の電燈つきたる心持、我またこゝに所を得たり。

十三日、始めて芙蓉の蕾に瓣の紅見ゆ。

十四日、芙蓉一輪開く。 子等起き出で、歡呼して見る。「今  
日一日きりで落ちるのだ」といへば、「つまんない」といふ。

十六日、午前三時頃覺めて戸を推す。 天地たゞ蟲聲なり。  
幾十萬の蟲のさまゞ變りたる節奏の聲おのづから相  
諧和して、急促なる曲を成し、我が身も家もその曲を踏ん

でずり出でんとす。 深夜の蟲聲は美にあらずして莊重  
なり。(凡人に聽け)

四 月見に人を招く

大塚楠緒子

此の金曜日は十五夜の月、常りゆかにつき、幼き者を  
主人役にして粗飯差上げた、所直前の露様のお子様方  
をもお招きやすつものに、所直の故郷様をお餅ひきとされ、  
何をおか下されたか。 少々さうり集りて、露様に遊  
び小傍まで、親ども語り合ひひき、日頃の交々、趣も  
変わり無も、語りひきとあり。 何れも、孫合せの、午後  
五時頃まで、光景下、かやうな、鳥様は、様姫

大塚楠緒子  
文學博士、大塚  
保治の妻、高塚  
知縣の夫人、高  
學、明、治、四、  
十、三、年、秋、  
三、十六、年、  
春、堂、の、筆、に、  
か、る、



次中...とお世中と云うよりお世...  
に小や或はジヨンのお伴も極楽...  
先は...  
九月二十五日

楠緒

中島様

尤も...の...  
故やめにソにすべく。

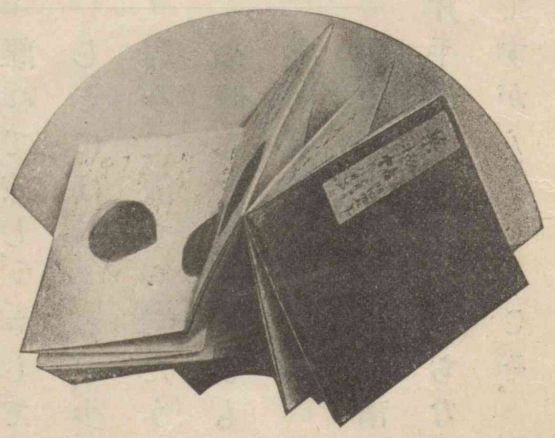
五 果物の趣味

正岡子規

果物ほど味の高く清きものはあらじ。小兒もこれを好み、  
仙人もこれを食べるとか。青梅は酸くして口を絞れども、鹽

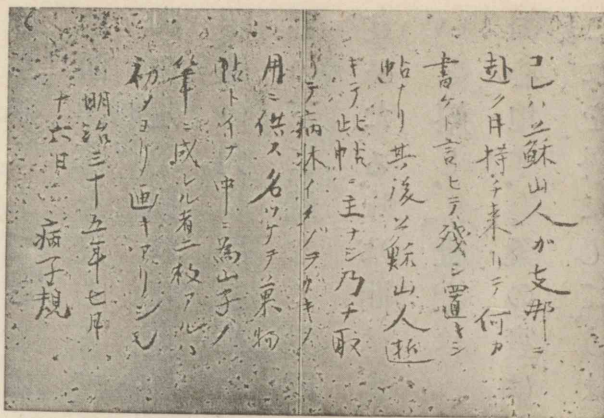
正岡子規  
名は常規、  
山形市の人、  
明治三十五年  
六月十六日

少しばかりつけんには、味言ひが  
たし。杏は乾からびて賤しく、李  
は水多くしてあさはかなり。莓  
は西洋莓を良しとす。されど、行  
脚の足草臥れて、草鞋の緩みたる  
頃、巖の角に腰打据ゑて、汗を拭ふ  
手の下に、端なく見附けて取りて  
食ひたる、味は問はず、時に取りて  
いと嬉し。枇杷はうまけれども、種子大きく肉少きは飽か  
ぬ心地す。桑の實はなべての人に知られねども、果物の中、  
これを外にして、うまきものはなし。晝餉さへした、めず



正岡子規の菓物帖





菓物帖の扉に正岡子規の筆蹟

コレハ蘇山人ガ  
支那ニ赴ク時持  
チ來リテ何カ書  
ケト言ヒテ殘シ  
置キテ帖ナリ、  
其後蘇山人逝キ  
テ此帖ニ主ナ  
シ、乃チ取リテ  
病牀イタヅラガ  
キノ用ニ供ス、  
名ツケテ菓物帖  
トイフ、中ニ爲  
山子ノ筆ニ成レ  
ル者ニ枚アルハ  
初メヨリ畫キア  
リシ也  
明治三十五年  
七月十六日  
病子規

に風を入れて、柱に倚り、襟を披き、片手にて團扇を持ちなが  
ら、一片を口にしたる、氷にも優りてすがくしうこそ。林

に貪りたる木曾の旅の  
思ひ出でられて懐かし。  
夏蜜柑ザボンの類、俗を  
離れて涼し。さして良  
しとはあらねど、少し  
病みて飯すらえたうべ  
ぬ時など、またなきもの  
とぞ覺ゆる。

梨は涼しく潔し。南窓

木曾  
長野縣西筑摩  
郡木曾川沿  
岸地方一帯の  
稱

檜は北海道の産を最も良しとす。齒にさはれば形消えて、  
涼やかなる風味ばかり口の中に残りたる、仙人の薬にも似  
たらんか。桃は種類多し。善きも悪しきもあり。王母後  
園の風味は知らねど、凡べて世に詔はぬところに一段高き  
趣あり。

栗は賤し。甘藷と較べられたるも口惜し。柿は野氣多く、  
冷やかなる腸を持ちながら、味はいと濃やかなり。多血性  
の人世を厭ひて里に隠れながら、なほ物に觸れて熱血を迸  
らすにも譬へんか。柚子は氣高けれど食ふべからず。石  
榴、無花果のわれから裂けたるは食ひ劣りぞする。葡萄は  
甘からず、澁からず、人に媚びず、さりとして世に負かず、君子の

王母云々  
支那の仙女  
王母が漢の武  
帝に仙桃を捧  
げたとはいふ  
説がある。



風あり。

我この夏頃より分けて果物を貪り、物書かんとすれば必ずこれを食ふ。書きさして倦めばまたこれを食ふ。食へば則ち心涼しく氣勇む。氣勇めば則ち想湧き筆飛ぶ。我力を果物に借ること多し。

日毎々々十顆の梨を食ひけり。

柿食うて洪水の詩を草しけり。(子規隨筆續篇)

自修文

六 柿二つ

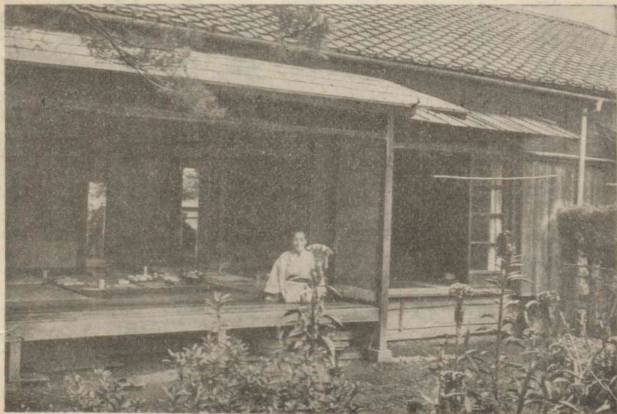
高濱 虚子

ランプの光は靜かに更けて行つた。時々上野の森に反響して轟

高濱虚子  
名は清、松山市の人、明治七年生、俳人。  
上野  
東京市下谷區上野公園。

き過ぎる汽車の音が聞えるばかりで、根岸の夜は沈んだやうに淋

日によつて不定ではあるけれども、此の頃は一體に彼の熱は夜に入つて下る事が多かつた。夜中頃から再び上るのであるが、其の平熱になつた時の心持は流石にすが／＼しかつた。病主人の頭はさう云ふ時に一層透明になるのであつた。彼は、自分を神かと疑ふばかりの明快な判断を、數限りない句の上に下す事が出来た。句の良否は、色の黒白のやうに明白に、一見して立ちどころに判断する事が出来た。



正岡子規の舊宅

根岸

上野公園の北の麓、正岡子規の住宅はここにあつた。

彼  
正岡子規。



自分で自分を怪しむぐらゐに、それが容易に且迅速であつた。彼の淋しい家庭には、六十を過ぎた老母と、今年二十七になつてまだ嫁がない妹とがあるばかりであつた。老いた母も、婚期を失した妹も、只主人の病を看とる爲に生きてゐた。二人は次の室の暗いランプの下で、病室の物音に耳を敬そだてながら、各黙つて針を運んでゐた。

看みるする  
看病する。

頓て妹は膝の絲屑を拂つて立ち上つた。それは、病主人の枕許に、盆に載せた柿を運ぶ爲であつた。「もう是ぎりかい。」と、彼はながし目に其の盆の柿を見ながら聞いた。「昨日あんなにお食べだから、もう是ぎりよ。」と、妹は答へた。盆の上には只二つしか載つてゐなかつた。

ながし目  
横目。

彼は凡べての物に健啖けんたんである中に、殊に果物を好んで食つた。中にも柿は飽く事を知らなかつた。彼は忽ち食指が動いたのだが、

健啖  
大食。  
食指が動く  
食欲がおこ

只二つの柿を今食つて了ふ事は心細かつた。それは、是非とも今日の大事業——「投書函の一掃」——が完了した時の慰藉の料に取つて置かねばならなかつたからである。彼は心の中で「呟つぶやいた」選が済んで了つたら、此の柿を御褒美に遣るよ。今一息だ。撓たふまずに片付けて了へ。」と、斯くて、漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心不亂に取掛つた。

慰藉  
なぐさめ。

燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬またきもせず冴え渡つた。傍の火鉢に炭のつがれた事も、時計が十二時を打つた事も、老いた母の寢床に入つた事も、彼は知らぬではなかつたが、それらは餘り深く彼の注意を惹かなかつた。妹が床に入つたのはそれから一時間も後であつたが、それは、其の物音が兄の仕事の妨にならぬやうに、いつ臥せつたとも分らぬぐらゐ、ひそやかであつた。静かな沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて、此



の夜の色の中に、獨り帝王のやうな威を示してゐた。最後に手に當つた草稿を見終へて後、彼は念の爲に「投書函」を掻き探して見たが、もう其處には一枚も残つてゐなかつた。彼は朱筆を投げ棄て



正岡子規筆蹟

病牀所見  
臥シテ見ル  
秋海棠ノ木末カナ  
秋海棠朝見ノ花ハ  
飽キ易キ  
秋海棠ニ向ケル病ノ  
寐床カナ

た仕事を片付けて了つた。慄へるやうな満足的情と、病軀に不相應な努力の後に來る疲勞の恐とで、彼の心は暫く掻き亂されてゐた。が、頓て其の頭を抱へてゐた手をほどいて、蒲團の外に現した彼の

たまゝ、兩手で頭を抱へて暫く身動きもしなかつた。久しく心にかゝつてゐ

顔は愈、興奮して、蒼白い皮膚の中にも、頬のあたりの赤みは色を増してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも眠いとは思はなかつた。燈火を中心とした此の病床六尺の天地は、今は何物にも煩はされない、極めて自由な、希望に充ちた世界のやうに思はれた。今や彼の體温は再び上つて、其の爲に、いつもの酒に酔つたやうな興奮した心持になつて居るのであると云ふ事には、氣が付かうとしなかつた。

彼は頬はしげに盆の上の柿を見やつた。柿の赤い色は媚びるやうに輝いてゐた。今まで抑へてゐた彼の食欲は猛然として振ひ起つた。彼は餓ゑた虎が殘忍な眼を光らして兎を掴むやうに、忽ち其の柿の一つを取りあげて、皮を剥き始めた。

高濱虚子 自署



此の柿は、伏見の桃山に庵を結んで居る愚庵と云ふ禪僧から贈つて来た釣鐘と云ふ珍しい名の柿であつた。さう言へば、形が何處か釣鐘に似てゐた。此の禪僧と云ふのは、維新の戦亂に、母と妹が



高濱 虚子

生死不明になつて了つた其の行方を何十年かの間探したが、遂に見當らなかつた事が動機となつて、中年から天龍寺の峨山和尚の鉗槌の下に僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があつたのであるが、此の禪僧も主人と同じく肺を病んで居る上に、萬葉調の歌を能くし、又書に巧であつた。俳句は作らなかつたが、それらの關係から互に推重して、何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は、桃山草庵に禪僧を訪ねた人が、其の庭前の柿を託

伏見 京都市の南方にある町。  
愚庵 俗名は天田五郎、明治三十五年、七月、歿。  
天龍寺 京都府葛野郡嵯峨村にある。

峨山和尚 俗名は橋本昌禎、天龍寺派、管長、明治三十四年、四月、歿。  
鉗槌 推重する。重んずる。

されて、遙々と携へ歸つて病床に齎したものであつた。

それは昨日の事であつた。其の人がまだ枕頭にある間に、彼はもう辛抱が出来なくなつて、其の柿を三つ續けざまに食つた。其の人が歸つた後も、夜寝るまでに十ばかり平げた。今夜枕頭に運ばれたのは、其の残りの只二つであつた。彼は其の一つを取つて、其の皮を剥くより早く、忽ちそれに武者振り附いたのであつたが、もう大方食ひ盡して、帯の所に達した時、少し顔を顰めた。それは稍濫かつたのであつた。けれども、彼はそれに頓着せず、其の帯の所の際まで少しも残さずに食つて了つた。

三千の俳句を閲し柿二つ。

常用日記に、彼は毎日の出来事を句にして、十句づつ書く事を日課としてゐた。明日になつて、今日の部を認める時に、忘れぬやうに此の句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て来るやう



に思はれて、頭がぐらくした。彼は始めて熱の高い事を覺えたのであつた。(柿二つ)

七 我が家の富

徳富健次郎

家は十坪に過ぎず、庭はたゞ三坪。誰かいふ、狭くして且陋なりと。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭しと雖も仰いで碧空を望むべし。神の月日はこゝにも照れば、四季も來り、風・雨・雪・霰かはるゝに到りて、興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆ。庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開

徳富健次郎  
舊號は廣花、  
熊本縣の人、  
昭和人、  
昭和六年  
文學者、  
十一年歿。

湯河原、春一週、  
早稲と、庭の  
李つゝあり。

徳富健次郎筆蹟

いて樹に滿つ。風ある日には、青々とかすめる空より、白き花ちらちらと舞ひ來りて、一庭須臾に雪を散ら

湯河原に來て一週間最早過ぎた。疲れも追々直りつゝある。

す。隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るが中に滿庭花の筵を敷く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花瓣あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、芳しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に開くは宜な



三十一日

りけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。その幹亭々として些の邪なく、我が如く直かれと教ふるに似たり。これと手水鉢の側なる八角金盤とは、葉廣うして我が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子欲しと思ふ心も起るなり。

つくくばふしの聲に世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃え出で、たゞ一株前の家主の植ゑ残したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しといふとも、秋のあはれ閑寂の趣は、却つて我が庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁なりせば、獨憐細菊、近荆扉」とや吟ぜまし。恥づらく

蛻巖 梁田邦美、明石藩の儒者、江戸時代後期の人、實暦七年(一八四七)歿、年八十六。

は、海内文章落布衣」といふべき身にあらざること。

屋後に一株の公孫樹あり。秋深くして、樹は金よりも黄なり。風の風起れば、その葉翩々として翻り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人はいふなる錦を、我は庭に敷きつめつ。木の葉落ち盡しては、さすがに淋しげなるも、日影月影いよ／＼多くなりて、空を見、星を見るに障なきは嬉し。(自然と人生)

獨憐云々 蛻巖の九月九日の時に、琪樹連雲秋色、飛、獨憐細菊、近荆扉、登、高、能、賦、今、誰、是、海内文章落布衣。

八 宮島にて

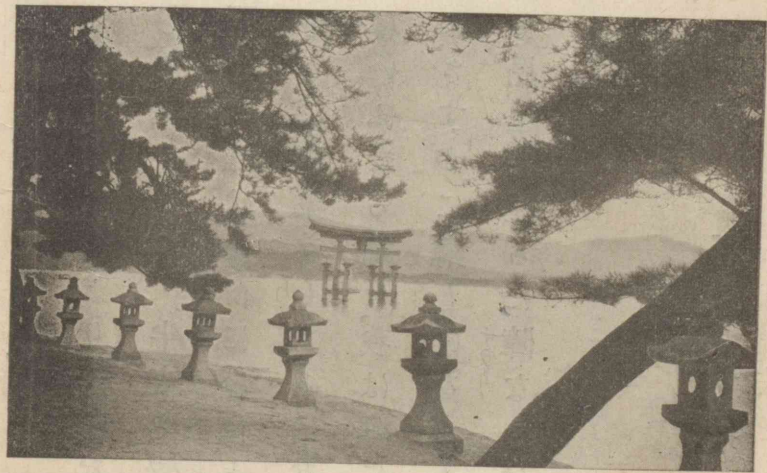
有本芳水

八 宮島にて

有本芳水 名は歡之助、兵庫縣の人、明治十九年生、文學者。



たゞ一人なる旅人に、  
 船路も近し宮島や、  
 入日は秋の山近く  
 沈みて、島は暮れにけり、  
 暮れて旅籠の欄に倚り、  
 まちかき海を眺むれば、  
 海にうつれる月のかげ、  
 さながら姫の櫛かとも。  
 島は祭の宵なれば、



宮島の海岸

月の光にそゞろきて、  
 宮まうでする人々に、  
 はしき少女も交るなり。  
 秋の夕を悲しげに、  
 浦回にひゞく笛の音。  
 月は宮居に空たかく、  
 鳥居のかげは水にあり。  
 安藝の宮島廻れば七里、……  
 月かけ青き海原に、



嚴島神社の鳥居



唄おもしろく船漕ぎて、  
宮に来る子はたが子ぞや、

心さみしき旅の身は、

月の光にあこがれて、

とほき渚のこなたより、

宮居まぢかく歩み來ぬ、

七段たかききざはしや、

長き廊下を歩む時、

ひたく寄する夜の潮、



社 神 島 嚴

さても龍宮に似たりけり、

海の匂もなつかしき

丹なる柱に身を寄せて、

笛の響を聞きゐれば、

涙流れてとまらず、

あゝ少女子よ、燈籠に

赤き灯影を入れよかし、

こゝろの鉦を打鳴らし、

歌ひあかさん旅の身は、  
(悲しき笛)



鹿 の 島 宮



九 百合と玉瀾

神詣の人や遊樂の群が入り亂れて、晝も夜もござめくき祇園まの社の、此處だけはひつそりと奥まつた藪蔭に、一軒の小  
 さな茶店がある。涼しい目鼻だちに氣品の見える若い女  
 主が、美しい女の稚子を片手に抱いたまゝ、かひくしく茶  
 を勧め客をもてなす様子が物珍しいので、人の足を留めさ  
 せる。この女主の名は百合、そして、抱かれた稚子は町子、即  
 ち後の閨秀畫家玉瀾である。

百合の實の父母は明かでないが、養母の梶子は京都の人で、  
 「梶の葉」といふ家集を遺した歌人である。久しい前から祇  
 園の社内に茶店を出して、始めて謂はゆる一服一錢の掬きを

祇園の社、  
 八坂神社、  
 幣大社、京  
 都の東方に  
 ある。昔は  
 祇園社と  
 南に祇園  
 林といふ  
 藪があつ  
 た。



祇園神社



定め、質素の中に風流を楽しんでゐた。百合もこの養母の感化を受けて、風雅を好み、歌も巧みに詠めば、裁縫を始め、琴・三味線・茶の湯・生花のわざまでも、凡そ女子の技藝百般行き渡らないものはなかつた。やがて風流な茶店の風流な母子の噂は、京都の町に高くなり、時には高貴な公卿衆でわざわざこの茶店を訪ねて、母子と語る人も少くなかつた。けれども、母子は益謙遜に正しく身を持つて、假にも人の口の端にかゝるやうな行はしなかつた。百合にも遺作の歌集があつて、「百合遺集」といふ。百合の夫は徳山某といつて、旗本の次男であつた。或仔細から京都に久しく流浪してゐたが、本家の後嗣が絶えたと



いふので、思ひがけなく急に迎へられて、江戸に歸ることになつた。夫婦の間に今は最愛の娘町子さへ擧げて、いつも春のやうな暖かさに包まれた家庭の中に、これは意地悪く吹いて來た嵐であつた。夫徳山は百合母子に共々江戸へ下るやう頻りに勧めて止まなかつたが、百合は心ならずも拒んで、幼い町子とたゞ二人、寂しくこの茶店に留ることとなつた。それといふのは、當時幕府の掟として、武士が平民の女と結婚することは禁じられてゐたので、たとひ夫に連れられて江戸に赴いても、正しい妻と呼ばれる望はなかつたからである。百合の雄々しい氣性として、それは夫婦の愛情にも換へ難い恥辱であつたのである。この時、百合は

僅かに二十三歳であつた。

夫に別れた後、百合は心細さも寂しさもたゞ一人の娘に紛らして、これ一つを手の中の玉と守りかしく、内、娘は日に増し成長し、やがて温雅な生れつきに豊かな藝術の才さへ備はつて見えるやうになつた。百合が母としてのこの上の願は、この最愛の娘のために立派な配偶を求めることであつた。

その頃、祇園の社に近い眞葛が原に、一人の貧しい畫家が住んでゐた。いつも髪も梳らず、垢ついた着物のまゝ、僅かに扇面に書畫を描いて、日々の糧に代へるみじめな境涯であつたから、何も知らない人達は、乞食繪師と侮り卑しめてゐ

眞葛が原  
京都四山附近  
の舊名。



たけれども、百合だけは、貧苦にくらまなないこの人物の貴い光を見出して、人々の嘲には構はず、娘の町子をこの貧しい



池野大雅

畫家に娶よめせた。この畫家こそは池野大雅である。

當時大雅は窮乏のどん底に落ちてゐて、家といふのも名ばかりのあばら家に、山と積んだ古反古の中に埋まつたまゝ、殆ど飢を凌ぎかねてゐた。この中に嫁入つて來た町子は、これを一向心にもとめない風で、ひたすら忠實に夫に事へて、假にもその心持に逆らふやうなことはなかつた。そして、暇

池野大雅  
京都の人、安永五年(西曆一七九〇年)五月十四日歿、年五十四。

を見ては、夫とともに、その

頃才人の名の高かつた柳里恭に就いて畫を學んだ。雅號を玉瀾といつて、山水も能く描いたが、蘭竹梅菊は殊に得意で、やがて當代の閨秀畫家として名を知られるやうになつた。その上、冷泉家の弟子となつて、和歌の道をも楽しんだ。元來大雅は志操の至つて高い一代の奇人で、名利の念の頗る淡い人物であつたから、その畫がだんく、世間に認めら



池野大雅筆蹟

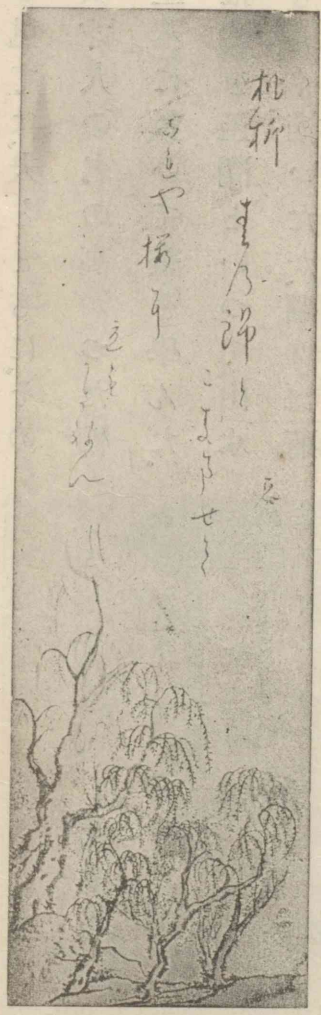
釣便  
不羨不棄初日坐東軒夢釣意  
常載酒徐投香餌出輕棹

柳里恭  
淇園氏、號は郡山藩士、畫

釣便  
不羨不棄不  
乘初日坐  
東軒夢釣  
意常載酒  
徐投香餌  
出輕棹



れて、畫を求めものが四方から集つて來るやうになつても、進んでこれを賣らうともせず、相變らずのあばら家の中で清貧に安んじてゐた。玉瀾も夫の心持に飽くまで同化して、終日破疊の上に夫と共に紙を展へては、興の到るまゝ、山水花鳥、好むところに任せて描き、興が盡きれば、琴を鳴らし、三味線を弾き、一緒に歌も歌へば、物語に夜を更かすこと



玉瀾畫 百合題

百合 桃柳春の錦と  
こきませてこ  
れや櫻に色も  
かさねん

もあり、子供のやうな自然の生活に身を委ねて、その日くを楽しく過してゐた。

かういふ話もある。或日のこと、大雅は大阪へ行く用事があつて出かけたものの、大切な繪筆をうっかり家に置き忘れた。あとで玉瀾が氣がついて、早速後を追つて行つて、知恩院の邊で追ひついたので、この筆をお忘れになりました。といつて、夫に手渡しした。ところが、大雅は何かに氣を取られてゐたと見え、つい落した品物を通行人が拾つてくれたと思つた様子で、何遍もびよこくお辭儀をして、そのまますたく、歩いて行つてしまつた。玉瀾も強ひて咎めようともしないで、これも黙つて歸つたといふ。

知恩院 祇園社の東北  
方にある、浄  
土宗の本山。



これは一つの笑話に過ぎないやうであるが、玉瀾が奇人の夫に付き従つて、どこまでもその奇行を通させ、些かも逆らはずはなかつた様子が、この話の中にも見えるやうではないか。大雅が當時世間に流行しなかつた漢畫に心血を注いで、遂に南畫の大家として一代を風靡し、その得意として屢、描いた富士の山よりも高い名聲を揚げるまでになつたのは、その優れた天才と貴い人格とのためばかりではなく、始終その側に愛情と誠意とを以ていたはりかしづき、夫の人格を大成させた玉瀾その人の功に埃つところの多かつたことを忘れてはならない。

玉瀾は夫の死歿に數年後れて、天明四年九月二十八日、七十

南畫  
南宗畫の略、  
東洋畫の一大  
流派。

天明  
光格天皇の年  
號。1781—1789

八歳の高齡で死んだ。(國文)

一〇 お母さん

島村民藏

皆さんは、<sup>〔伊太利〕</sup>イタリーの有名な畫家<sup>ラファエル</sup>の描いた<sup>マド</sup>マド<sup>Madonna</sup>ンナを御存じでせう。一體マドンナのやうな婦人が、實際此の世の中に居るでせうか。多分居らないでせう。では、ラファエルは如何にしてあの繪を描く事が出来たのでせう。ラファエルがああ繪に就いて自分で話して居る事があります。それは、彼が世の中の多くの母親を視て歩いて、どの母親にも必ず或一つの美しい點があるのを見付けて、蜂が蜜を集めるやうに、それらを悉く寄せ集めて、あの一

島村民藏  
東京市の人、  
明治二十一年、  
生、劇作家、  
早稲田大學講  
師。  
ラファエル  
(1483—1520)  
マドンナ  
聖母マリヤの  
像をいふ。

一〇 お母さん

百合





(筆ルネッフラ) ナンドマ

實際生活から採集したのである事が解ります。純潔神のやうなマドンナに比べるに足る婦人は、恐らく此の世には居りません。けれども、我が子の顔に見入る母親の面上に、必ず神聖な或物の現れる事は争ひ難い事實であります。

の畫として現したのださうです。ですから、あの繪の持つ崇高さと清淨さとは、ラファエルが勝手に描き上げたのではなく、世の中の多くの母親の

夕方に寢床の中の赤ん坊を覗いて見られたり、皆さんの幼い弟妹を抱きしめて頬ずりをされたり、又病氣に罹つた皆さんを看護されたりする時の、お母さんの様子を注意して御覽なさい。頭から後光がさして居りはしませんか。勿論本當の後光がさす筈はありませんが、併し、さう云ふ瞬間には、お母さんは自分の事は全く忘れて、只もう子供の事ばかり考へて居られるので、そこで頭の上に天女のやうな氣高さが漲り溢れるのです。それが後光なのです。ですから、誰でも自分の母親を天使のやうに感じるのです。世間には天使らしい母親が澤山居ります。しかし又、眞に優しい善い母親ではあるが、我慢のない爲に、直ちにかつと



なつて、自分の子供を酷く取扱ふやうな事もないではありません。ラファエルはさう云ふ事實を残らず見たり聞いたりして、さうして、其の中に



ラファエル

ルの眼を持つて居るのです。そして、其の眼には母親の崇厳な本體が見えるのです。私は何時か或男の子の話を聞いた事があります。其の男

たりして、さうして、其の中に氣高い或物を見出したのです。皆さんの中に、どんな場合でも、お母さんに向つて愼み深く、愛情の濃やかな人があるなら、其の人はラファエ

の子の母親は、お伽噺に出て来る悪い狼のやうに、手の付けられないひどい婦人だつたさうです。それにも係らず、其の男の子は如何にも物優しく母を敬ひました。「なぜお前は親から仕向けられる通りに親に仕向けないのか」と人に尋ねられると、私にはそんな事は夢にも出来ない。子供を抱いた世の中の母親は、どれもこれも私に取つては神聖である。私のお母さんも一人の子供を育てられたのだから、私は一生お母さんに禮を盡すのだ」と答へたさうです。私が能く見掛けるのは、息子や娘達が成長するに随つて、次第に母親に對して暴慢不遜になる事です。而もそれを非難でもすると、それはお母さんの自業自得だ。お母さんが



何かにつけて口喧しく小言を言ひ、冷酷な風を見せるからだ。返答します。けれども、何故にお母さんの痼癢は募るのでせう、何故に口喧しく小言を言はれるのでせう。皆さんは僅か一晚能く睡られないだけでも、どれぐらゐる神経が昂ぶつたり、不機嫌になつたりするかを考へて御覽なさい。皆さんのお母さん達は、皆さんの爲にどれほど多くの夜を睡られなかつた事でせう。それは、皆さんが病氣に罹つた晩ばかりでなく、皆さんの成績や行爲などを苦に病んで、まどろまれなかつた夜までも加へて云ふのです。其の上、お母さんはどれほど澤山な艱難辛苦に堪へられなければならぬか、それが皆さんに解りますか。さう云ふ艱難辛苦

は、皆さんが大人になつて始めて知るか、それとも一生知らずに終るのです。皆さんの爲に犠牲にした睡眠を取返すのには、お母さんは満一年間晝夜寢通しに寝る必要があるぐらゐです。所が、お母さんにはさう云ふ暇がないので、そこで自然に神経は昂ぶり、せつかちになり、怒りつぽくなられるのです。皆さんの中で、お母さんが自分の爲に體を悪くされたのに氣の付く人は、お母さんに對して失禮な恥知らずな挨拶をした時には、何時もきつと耳元まで赤くなるに相違ないでせう。

詩歌の極致

佐々木信綱

佐々木信綱  
三重縣の  
人、  
明治五年の  
生、  
東京文學院  
の  
大學生、  
國  
文學  
講  
師、  
大  
學  
士



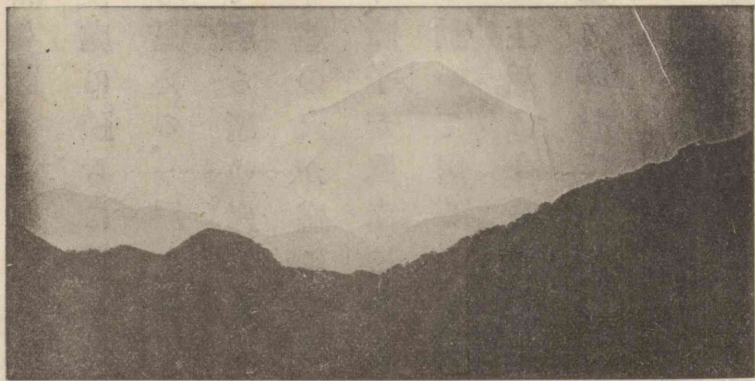
ふと眼を覺ますと、それとなく夜明近いけはひである。カーテンを引くと、窓外の景色が見える。汽車は裾野驛を通過して、緩やかな勾配を御殿場驛へと登つて行くところである。硝子戸を聊か開けると、數日の旅に疲れた後十分に得た熟睡から覺めた靜かな頭が、曉の空氣に觸れて、玲瓏と澄みきつたやうに覺える。

ちつと前面を見つめると、靜かに薄黒く横たはつて居る愛鷹山の上に、一輪の寒月が白く冷たい光を放つて、その東には、三つの星が正しく相並んで清く懸つて居る。更に東に雪の富士が淡く仄かに天そ、り立つて、その東の肩のあたり一つ星が煌いて居る。神祕と靜寂との籠つた何と

愛鷹山  
富士山の東南

もいへない光景の中に、殆ど心を吸ひこまれたやうになつて、自分はまだ見守つてゐた。

汽車が刻々に進み、夜が刻々に明けて行くに連れて、富士の色が刻々に變つて行くのが解る。初は淡い白さであつたのが、やう／＼明るくなつて來るに連れて、雪の色が段々白くなり、段々鮮かになる。すると、今まで曉の冷たい靄の中に眠つてゐた麓の杉の眞黒な木立や、間近い枯



山 士 富 の 曉



薄の揺いで居る低い丘や、月の光を照り返す氷つた水田な  
 どが、やゝ明かになつて來た。此處彼處に疎らに散在して  
 居る賤が屋からは、白い煙の立つのも見える。戸を開け放  
 つて焚いて居る竈の火の赤いの  
 も見える。爐の火が盛に燃えて  
 居るらしく、障子が眞赤に照らさ  
 れて人影の動いて居るのも見え  
 る。人間の生活は今や將に始ま  
 らうとして居る。こんな地上の景色を靜かに見下して居  
 る富士の面は、この間にまた變化を示した。東の空の紅の  
 色が一段と増して來たのであらう、眞白だつた雪の色が段



網信木々佐

富士山を詠ん  
 だ歌 荷田春満  
 聞きしより思  
 ひしより見  
 して高き山は富  
 士の嶺。  
 賀茂眞淵  
 富士の嶺の麓  
 を出でて行く  
 雲は足柄山の  
 嶺にかゝれ  
 り。  
 心あてに見海  
 白雲は麓にて  
 思はぬ空に晴  
 る。富士の  
 嶺。  
 野々口隆正  
 雲かゝる愛鷹  
 山は高ければ  
 晴るれば富士  
 の麓なりけ  
 り。  
 加藤枝直  
 天の原照る日  
 嶺に今も神代  
 の雪は残れ

段と紫がかつて來て、神祕の裡から現れ出た山の姿は、今や  
 いひやうもない莊嚴の趣を呈した。かくの如きこと二三  
 十分餘、汽車は御殿場を経て、富士の姿を山蔭に見送つた時  
 には、いつしか夜も全く明け離れて、月も星も光を朝日に讓  
 つてゐた。  
 自分は夢から覺めたやうに我に返つた。しかも、今しも見  
 て來た富士とその裾野との曉の色の清らかさと美しさと  
 が、幻のやうに眼から消えない。自分はこの大きな美に對  
 して、頭が下り、眼に涙がにじむのを覺えた。それとともに、  
 心に打つが如く起つた考は、この清らかさ、この美しさ、これ  
 をこゝろに我が詩歌の極致であるといふ信念だつた。美は

千種有功  
 たび見たり  
 たび見たり  
 雲風の姿さし  
 ばめぬ富士のし



もとより到る處にある。或は深い心の悩みの中にもあらう。或は人の心を誘ふやうなあてやかさの中にもあらう。或は複雑な人事の曲折の中にもあらう。深刻といひ、艶麗といひ、優といひ、雅といひ、さまざまの境地はいづれも詩歌の領分である。我々はもとより美をさまざまの境地に求めねばならない。しかし、美の極致、詩歌の極致といふべきものは、この曉の富士によつて示された、この純な、まじりけのない、清く、美しく、しかも貴いこの感じの中に、これを求めるべきであらう。若し美の神が人間にその姿を現すならば、それは實にかやうな景色に於てであらう。

佐々木信綱自署



かくの如きは、その時自分の考へたところである。しかも、更にこれを考へて、こんな自然の美に對して、こんな神韻を感じ得るのは、實に我等詩歌に志すものの眞の幸福とすべきではなからうかと思つた時、自分の胸は言ひ知れない喜に充たされてゐた。(和歌百話)

自修文

一二 文章雑話

島崎藤村

一  
十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には経験のなかつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に中流までも進むことが出来るやうになつて、一夏も水泳場に

島崎藤村  
名は春樹、長  
野縣の、  
治五年生、  
學者。

隅田川  
荒川の千住町  
以下の稱。



通ふ中には、向ふの河岸まで泳ぎ越すことが出来た。更にまた一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃にはよく分らなかつた。瀬の速い遅いも分つて來たし、淡水と潮水の雜り合つたあの川の中の冷たい處と温かい處とも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を泳ぎながら見ることも出来るやうになつた。板子なしには溺れる外はなかつた私も、二夏の末には、優に隅田川を横切つて往復することが出来るやうになつた。私は普通の泳ぎ手の行ける處までは自分も到達することが出来るやうに感じた。けれども、それ以上に進むことは容易でなかつた。私の體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人を見たりすると、全く感歎してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達することの出来るやうな境地があるに相違ない。そして、根氣さへあれば、そこまで行くことは決して

困難でないに相違ない。

二

信州の小諸にゐた頃、私は弓をやつたことがある。誰でも、最初の中は、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。「たゞ當りさ



村 藤 崎 島

へすればいゝ。」かう思ふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼む所もなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして、幸に當つた矢は、高慢で、頼み「熟練」を思はせるばかりである。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場に來た。その老人はまづ姿勢を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、た



誰か舊き生涯を安んぜんとする  
ものぞ。おのづかじに新しきを用  
かんと思へるぞ、若き人々しつめ  
ある。

藤村

島崎藤村筆蹟

とひ的を貫くことが出来  
ないやうな場合でも、一手  
揃ひで同じ場所を行くや  
うになつた。

これはまた文章の道にも  
當嵌めて見ることが出来

る。たゞ好い文章ばかり  
作らうと思つて焦心する

ことは決してその目的を

焦心  
氣をもむ。

達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふものは、どうして  
もまづ「自己」から十分正してかゝらねばならない。

三

同じ頃に、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を取つたことがある。讀

書の傍、よくその鋤を擔いで行つて、土を耕して見た。私はまづ荒  
れた畠の地面を掘り起すことから始めた。土を碎いた。小石を  
擇り分けた。地均しをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗  
や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠に  
は、大根・白菜・茄子・豌豆及び胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取  
りに行き、サクをかけて行つた。馬鈴薯の花が盛りの頃、試みに土  
の中を探つて見ると、はや丸い薯が幾つも、根元の方から出て  
來た。豌豆の蔓が長く延びて、人の丈よりも高く手に絡みついて  
居る畠の中には、嫩かい莢を摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも  
自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それ  
から、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手でよく整理  
されて居る畠の間などを歩き廻る度毎に、耕作の苦心といふもの  
が痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私は或耕作を通

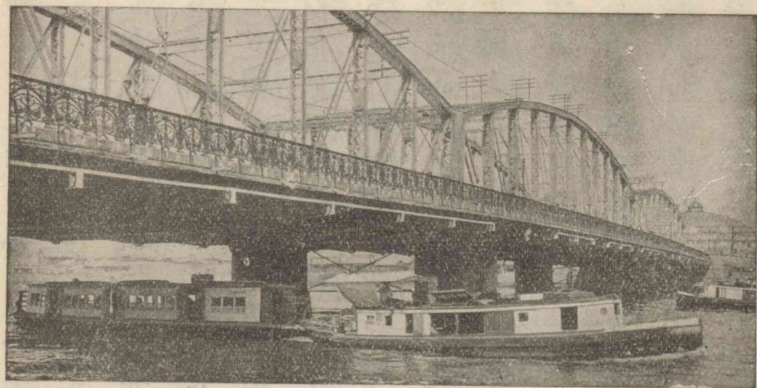


して、非常に嚴肅な念に打たれたことを、  
今でもよく思ひ出すことが出来る。

文章の手本となすべきものが、どんなに  
澤山我々の周圍にあつても、それを悟ら  
ないかぎりには仕方がない。それを悟ら  
うとするのには、どうしてもまづ自分で  
試みなければならぬ。「試みる」といふ  
ことは「悟る」といふことの始である

四

淺草の新片町に住んでゐた頃、家が淺草  
橋や兩國橋に近いので、私はあの隅田川  
の界限を漕ぎ廻つたことがある。最初  
の内は、無暗と手足を動かして、あの長さ



橋 國 兩

界限  
あたり。

一丈ばかりもある櫓を前へ押ししたり手許に引いたりして、骨折つ  
て見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。が、次第々々に  
手足を動かすことが少くて、體全體の力でゆつくりと櫓を押すこ  
とが出来るとやうになつた。「向ふから大きな傳馬がやつて來たぞ。  
あいつに一つ衝突しないやうに。」さう思つて漕いで行く樂みな  
ども、それから起つて來た。その後、船頭のする所を見ると、實にゆ  
つくりしたものである。そこには、「力の省略」があり、「簡素の美」があ  
るのである。

傳馬  
大船と陸との  
間を往來する  
小舟。

弄する  
もてあそぶ。

一三 現代歌人の和歌

文章の道に於ても、無暗と筆を弄することが決して自己の眞の「表  
白」とはならない。眞によい文章には、眞によい「結晶」の力があるも  
のである。(飯倉だより)



○

摘草のほひ残れる指先を

若山牧水

洗ひてをれば野に月の出づ。

浴びくゝて我が立ちたれば體より

したゝる水に湯氣の立つなり。

○

漕ぎ來れば沼邊の柳老いにけり、

北原白秋

上げつばなしの四つ手網の上。

たまくしげ箱根の山に夜も  
すのうき清けさ

蹟筆吉茂藤齋

若山牧水  
名は繁宮崎  
縣の人、明治  
十八年生。

北原白秋  
名は隆吉、福  
岡縣の人、明  
治十八年生。

たまくしげ箱  
根の山に夜も  
すのうき清け  
さ  
茂吉

三月まへ穂麥のびたる畑なりき、

今血のごとく雞頭の咲く。

○

己が身をいとほしみつゝ歸り來る

齋藤茂吉

夕細道に柿のはな落つも。

茶のはなのこぼれて白き道を  
きぬかたへの藪は去來の  
やぶなり

蹟筆郎二篤山尾

齋藤茂吉  
山形縣の人、  
明治十五年  
生、醫學博士。

茶のはなのこ  
ぼれて白き道  
をきぬかたへ  
の藪は去來の  
やぶなり  
篤二郎

ゆらくと朝日子赤くひんがしの

海に生れてゐたりけるかも。

○

尾山篤二郎

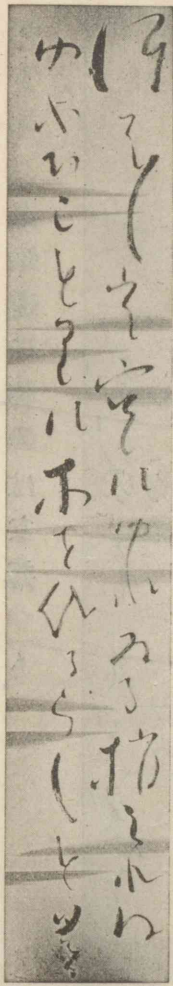
尾山篤二郎  
金澤市の人、  
明治二十二年  
生。





鳥羽の海に得てし鮫をよへ食ひて、  
齒なき齒じしのため朝かな。  
天の陽は白くかよひ四方は今

ひたしづまりて春さりけらし。



前田夕暮筆蹟

向日葵は金の油を身に浴びて、  
ゆらりと高し口のちひささよ。

文ながき萱をいだきて山原の

目を仰ぎたり屋根葺く人は。

一四 我が袖の記

一 熱海の冬

熱海の二月は、誠に楽しき哀れ深き冬の暮らしなりき。よ  
そならば吹雪に閉ぢられて日影も薄き冬の真中も、名にし  
負ふ暖地なれば、こちふく風も寒からず。睦月はじめの梅  
が香は早くも春を告げ渡りて、野邊の焼跡の萌えそむるは  
人の心も時めく頃か。 苦屋どもに岩海苔の薫れるもをか  
しく、蘆の屋に心細く立ち昇る煙も長閑かなり。  
海原遠く見渡せば、相模安房の山々雲か霞の姿おもしろく、

高山樗牛

高山樗牛  
名は林次郎、  
山形縣の人、  
評論家、文學  
博士、明治三  
十五年歿、三  
十三、  
熱海、  
靜岡縣伊豆國  
の海岸の町、  
温泉地。

睦月

一月の事

前田夕暮  
名は洋三、神  
奈川縣の人、  
明治十六年  
生。

ほそくんと空  
にゆれぬる梢  
みればゆふひ  
ごもりに木を  
伐るらしも  
夕暮





熱海

大島<sup>\*1</sup>が根に立つ煙の風にたなびけるに、水や空とも分ち兼ねたり。沖の小島と誰が詠みたりけん初島<sup>\*</sup>わたり漕ぐ船唄の、寄る浪毎に聞ゆるもゆかしく、魚見<sup>\*</sup>が崎のこなたより、渚を傳うて、砂白く松青きほとり、濱千鳥の群れ飛ぶ様もいとをかし。後には日金<sup>ひかね</sup>十國<sup>じゅうこく</sup>の山々を負ひ、前には天空海濶<sup>あまのうみ</sup>の間に一灣の春を擁<sup>よう</sup>する豆南<sup>まめなん</sup>の風光は、筆にはなかくに及びがたし。

大島  
一。伊豆七島の

沖の小島  
箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の伊小島に波のよる見ゆ。(源實朝)  
初島  
熱海の東南海上三里。  
魚見が崎  
熱海町の南端の岬。

二 三保の春

松風遠く吹き合せて、波の音も微かなる、物思まざる夕なりき。我ひとり清見<sup>きよみ</sup>が關の宿を立ち出でて、三保の松原に遊ぶ。入日の影は雲にのみ残りて、月未だのぼらず。田子<sup>\*</sup>の浦回の夕風に、千鳥の聲もいと稀なり。江尻<sup>えしり</sup>清水<sup>しみず</sup>をはや過ぎて、龍華寺<sup>りゅうげじ</sup>の輪塔を右手に見る。袂寒き山嵐に入相の鐘を吹き送りて、初春の哀れ一入深し。三保に



清見が關  
靜岡縣、こゝは興津町を指す。昔の清見が關は今の清見寺の邊にあつた。

田子の浦  
靜岡縣、富士川口の海岸。

江尻  
今清水市の大字。  
清水  
興津町の西南にある市。  
當時は江尻も清水も町であつた。  
龍華寺  
清水市にある、法華宗。



辿り着ける頃は、月漸く上り、清見潟の水煙は關路遙かに立ち罩めて、富士の高嶺に雪の色白し。見渡せば、一帯の松林木深く生ひ茂れるかな。木立の篩へる月の明りに、残んの雪の色冴えて、杜の下道杳かなる、霞に落つる影もなし。波の音漸く近くして、我は羽衣の松に添うて立ちぬ。羽衣の松は我が年久しく思ひ焦れしものなりき。よし、さらば、今宵は月と共に立ち明かさんなかな。

松は早く枯れて、幹の朽ちたるが残り。そのもとにゆかりを誌せる石ふみありしが、月の光おぼろにして、今は見え分かず。あはれ、波の音と松風とのみぞ、今も昔に變らざりける。(樗牛全集)



三保の松原

清見潟  
静岡縣興津町  
の南方の海



一五 徳川光友の室

熊田葦城

長局の方俄に物騒がし。「あれよ、あれよ。」と叫ぶ聲、はたくと走る音、只事ならじと覺ゆ。

夫人は居室にあり。悠然として騒がず、徐ろに侍女に命じぬ。

「五條を召せ。」

老女五條は召に應じて來れり。顔色青ざめ、呼吸忙し。

「何事ぞ。」

夫人の言葉未だ終らず、五條は早くも口を開けり。

「一大事の候。只今、中山茂兵衛奥女中を刺し殺し、血刀を

徳川光友  
尾張の國主、  
家康の孫、元祿  
十三年（三六〇）  
直の子、元祿  
十三年（三六〇）  
歿、年七十六。  
熊田葦城  
名は宗次郎、  
福山市の人、  
文久二年生、  
著述家。



提げて部屋々々を騒がし候。あれく、あのやうに騒ぎ居り候。こゝにおはしましては心元なし。早々御動座遊ばさるべし。」

夫人はきつと五條の顔を見遣りぬ。

「それしきのこと、なに一大事といふべきぞ。茂兵衛は亂心せりとこそ覺ゆれ。當番の男どもやがて取鎖むべければ、構へて騒ぐべからず。そこにゐよ。何の周章つることかある。」

夫人は端然として座をも動かさず。茂兵衛は間もなく庭中の井戸に身を投じて果てけり。事乃ち已みぬ。

二

一年は夢の如く過ぎぬ。

「去年の今日は、茂兵衛が奥女中を殺しし日には候はずや。あの時の恐ろしさ、今に忘れ候はず。」

侍女等次の室に在りて、當時の事ども語り合ひけり。折柄

一天俄に搔曇れり。

風捲き、雨奔り、電閃き、雷轟く。天色黯澹として、晝なほ夜の如し。侍女等は顛ひ戦きぬ。夫人は従容として平常の如し。忽然、火柱立ちぬ。轟々として天地も碎けんばかりに鳴りはためきぬ。先に茂兵衛の投ぜし井戸に雷の落ちけるなり。

侍女の中には、或は倒れ、或は氣絶するものあれども、夫人は



顔の色だに變へず。

三

人はこゝに投じ、雷はこゝに落つ。

「不吉の井戸は埋めんこそ好けれ。」

奥役の議は忽ちに決しぬ。

夫人は大久保金兵衛を召して諭せり。

「雷の落ちたる井戸を不祥なりとせば、この邸、この庭、また

皆不祥として改むべきにあらずや。井戸は底を浚へ水

を替ふれば仔細なきものぞ。舊き井戸を塞ぎて新しき

井戸を穿つは、人を勞するのみにて、何の益もなきことぞ

かし。」

金兵衛その理に服しぬ。埋井の議乃ち止みぬ。夫人の言ふところ理義極めて明白、人をしてこれを諍ふの辭なからしむ。識見雋邁なるにあらずんば能はじ。賢夫人と謂ふべし。

一六 二宮翁夜話

福住正兄

川久保民次郎といふ者あり。二宮翁の親戚なれども、貧にして翁の僕たり。國に歸らんとして暇を乞ふ。翁曰く、それ空腹なる時、他に行きて、「一飯を賜はれ。予庭を掃かん。」といふとも、決して一飯を振舞ふものあるべからず。空腹を怵へて、先づ庭を掃かば、或は一飯にありつくことあるべし。

福住正兄 神奈川縣の高弟、二宮尊徳の年六十九。通稱は金次郎、相模國の人、江戸時代後期、安政三年(一八五〇)歿。





二宮尊徳  
及及びその筆蹟

温故而知新  
破るふ積る木は  
あまこりして  
て照神の足跡を見ん

これ己を捨てて人に随ふ道にし  
て、百事窮してもまた通すべき道  
なり。我若年始めて家を持ちし  
時、一枚の鋤損じたり。隣家に行  
きて、「鋤を貸し給はれ。」といひ  
しに、隣翁曰く、「今此の畑を耕  
し、菜を蒔かんとする所なり。  
蒔き終らざれば貸し難し。」と  
いへり。「我家に歸りても別  
に爲すべき業なし。よりて、此の畑を耕して進ずべし。」とい  
ひて耕し、菜の種を出されよ。序に蒔きて進ぜん。」といひて

温故而知新  
新  
故道に積る木  
の葉をかきわ  
けて天照神の  
足跡を見ん

蒔きしに、隣翁喜びて鋤を貸し、なほ曰く、「鋤に限らず、何にて  
も差支の事あらば、遠慮なく申されよ。必ず用立つべし。」と  
いひしことありき。斯くの如くすれば、百事差支なきもの  
なり。汝國に歸り、新に一家を持たば、必ず此の心得あるべ  
し。又汝今壯年なり。終夜いねざるも障なかるべし。夜  
夜いぬる暇を勵まし勤めて、草鞋一足或は二足を作り、明日  
開拓場に持ち出し、草鞋の切れ破れたる者に與へんに、受く  
る人禮せざらんとも、もといぬる暇にて作りたるなれば、其  
の分なり。禮をいふ人あらば、それだけの徳なり。又一錢  
半錢を以て應ずる者あらば、これ亦ひとときはの益なり。よ  
く此の理を感銘し、連日怠らずば、何ぞ志の貫かれざる理あ



らんや。我幼少の時の勤、此の外にあらず。肝に銘じて忘るべからず。」と。

翁曰く、世の中は今事なしといへども、時には變なきこと能はず。これ恐るべきの第一なり。變ありといへども、之を補ふ道あれば、變なきに等し。變ありて補ふこと能はざれば、大變に至る。古語に、三年の貯蓄なきは國に非ず。といへり。兵隊ありといへども、武具軍用備はらざれば、すべきやうなし。家も亦然り。それよろづのこと餘裕なければ、家を保つこと能はず。然るを況や國家天下をや。人は予が教を儉約を専らとするものといへども、儉約を専らとするに非ず、變に備へんがためなり。人は予が道を積財を務む

三年の貯蓄  
禮記にある  
語

るものといへども、積財を務むるに非ず、人を救ひ世を開かんがためなり。」と。

翁曰く、禍福といふものは二つあるにあらず、元來一つなり。近く譬ふれば、庖丁を以て大根を切る時は福なり、指を切る時は禍なり。只物を切ると指を切るとの違のみ。それ庖丁は一つなり。而して指を切れば禍とし、大根を切れば福とす。されば、禍福といふも人事の私に非ずや。水も亦然り。畔を立てて引けば、田地を肥やして福なり、畔なくして引けば、肥土流れて田地瘦せ、其の禍いふべからず。それ水は一つなり。畔あれば福となり、畔なければ禍となる。富は人の欲する所なり。然れども、己がためにする時は禍之



に随ひ、世のためにする時は福之に伴なふ。財寶も亦然り。散ずれば福となり、積んで散ぜざれば禍となる。これ人々の知らざるべからざる道理なり。」と。(三宮翁夜話)

一七 富籤

矢田挿雲

文政五年十二月二十三日、小石川水道橋の輕士で井上半次郎といふものが、春の準備のために、淺草藏前の札差業板倉屋文右衛門方へ行き、御切米の賣上代金二兩を受取り、つまらなさうな顔をして、しをくくと本郷の切通坂へ差掛つた。と、湯島天神境内に黒山のやうな人だから。建札に、金千兩の富籤興行とあるのが見えた。半次郎の胸にはむらく

湯島天神に  
のまつりしち  
るあま  
菅原道賢  
キヲ男命

矢田挿雲  
名は義勝、神奈川縣の人、明治十五年生、俳人、報知新聞記者、文政仁孝天皇の年號(一六六一)云

射利心  
利益をえよう  
うしよる心

と射利心が兆した。二兩の内、一分を捨てたつもりで、札を一枚買はうかと思つたが、當らなければ元も子もなくなるのだから、二分の金がふいになれば、夫婦三四日間の内職で埋合せなければならぬ。」と、半次郎は人波に揉まれて、劔突を喰ひながらも、さすがに考へた。その頃の富籤といふのは、まづ興行者側の世話人總代と、寺社



現時の湯島天神

一分  
二兩の四分の  
えも子  
(元金も利も)  
もなくなると  
ぬ職  
(よびの仕業)



奉行の家來で大檢役・小檢役といふ役人と、それに烏帽子・直垂を着けた天神様の神主まで立會つて、臨時仕掛の棧敷の上へ投票箱を擔ぎ出し、内部の番號札を十分搔き廻した上で、箱の一方に開いて居る



風折烏帽子子と直垂

札は五千人分あるから、その刹那まで緊張しきつた場内の貪慾氣分が、次の瞬間には、一番札千兩、二番札百兩、以下十兩札八枚と、都合十人の満足に、四千九百九十人の失望・嫉視・自

で、箱の一方に開いて居る小さな孔から、長い揉錐を突つ込み、それで突き當てた番號札の持主に、千兩の賭金を與へるといふ仕組。

大檢役  
立會つて  
（トトよにほそ）  
臨時仕掛  
（さよつとりのり）  
（そざにくつたもの）

暴自棄の淺ましく物凄しい氣分に一變するのである。半次郎は思ひきつて、一枚買つて入札した。開票までには時間があるので、番號引換證を受取つて歸宅した。夕餉の膳に向つて、一分無くすか、千兩取るか、俺も聳に來て以來、女房に着物一枚買つて遣らず、十五俵扶持の不足を、夫婦が提灯張の手間賃で補つて行くとは情ない。と鬱いで居るところへ、表を「お話し」といつて瓦版が飛んで行く。「お話しとは即ち今日の號外のことである。早速買つて見ると、千兩の當り札は、四千四百四十四番と、自分の番號が出て居るのであつた。半次郎は逆上した。追取刀で湯島天神へ飛び出さうとする袂を、女房お松がしかと捕へて、事情を質すと、富

札



が當つたから、今年の正月は餅も澤山搗ける。鮭も味噌も澤山買入れ、其方にも着物を買つて、などと、半次郎はたわいのないことばかりいふので、富籤といふものがお松の腑に落ちるのは容易なことではなかつた。しかし、ほゞ飲込がつくと、お松はきつとなつた。「それでは十人の人が喜ぶ裏には、四千九百九十人の歎があるのです。ね。十五俵でも、井上の家は、祖先以來御譜代の御家人、貴方も小祿は御承知で養子に來られたのです。たとひそのままで一生終られても、恥かしくはございませぬ。日頃から、不義にして富み且貴きは浮雲の如し。」と、聖人の訓を口癖にせられるお心掛に魔がさしましたか。連れ添うて今日

不義にして孔子の語、論語にある。

まで五年が間、見上げた武士と敬うて來ましたけれど、只今の卑劣なお振舞には愛想が盡きました。」と、引換證を見るも汚ららしい。と火鉢に投げ入れ、それで御立腹なら、お手討に遊ばせ。」といつた。半次郎は器量の悪さ一通りでない。が、もとゞ馬鹿でない男であるから、あゝ、面目次第もござらぬ。この富籤には未練はござらぬでござる。と、八角になつて詫びた。

一方、天神境内の興行場では、親籤の申出がないので、芋の子の煮えるやうな騒。このこと瞬く間に公儀に知れ、翌年正月十七日の御用始に、半次郎は御小人目付を拜命し、終に長崎奉行まで累進した。これが即ち井上備前守の前身であ



る。曾て一分の富札を買つて僥倖を夢みた半次郎は、晩年徳川幕府の財政を司管する御勝手掛御勘定奉行として時めき、遂には三千石の大身となつた。(江戸から東京へ)

自修文

一八 伊吹山

近松 秋江

「あゝ、伊吹山が見える」と、私は思はず獨語し、更に「好い山だ」と感歎の聲を放つた。さういふ中にも、山の全身が車窓に向つて滿幅の繪畫を展開して來た。「好い山だ。今日はまた不思議にはつきり見える」と、私は重ねて感歎の聲を洩らした。全く今日ぐらゐ伊吹山をよく見たことは、二十何年の間幾度か此處を往復してゐながら始めてであつた。

近松秋江  
本名は徳田浩  
司、岡山縣の  
人、明治九年  
生、文學者。  
伊吹山  
滋賀縣の東境  
にある山。

伊吹山！ 何といふ記憶に懐かしい山であらう。私の幼年時代から少年時代に至る間の修養と趣味とは、常に日本の歴史とその史蹟に關聯した地理とにあつた。私がこの伊吹山を覚えそめたのは、平治の亂に一敗地に塗れた源義朝が義平・朝長・頼朝の三子を連れ、僅かに鎌田政家等二三の家の子郎黨に擁せられて、東國を指して落ちて行く途中、雪のために父子相失ひ、今年漸く十三歳になつたばかりの頼朝がたゞ一人、尾張守平頼盛の家人宗清に捕へられて、六波羅の屋敷に引いて行かれた條で、それがどんなに私の哀感をそゝつたことであらう。私はそれをよく記憶してゐて、十九の年始めて上京する時には、汽車の窓からこの伊吹山を眺めることを忘れなかつた。都を離れ失意の心を懷いて北國に落ちて行く人、或は東山道を経て遠い奥州の果に歸る人、逢坂の關を越えて湖水の彼方に比良・比叡の山々を遠く顧みがちに近江路を行く間

宗清  
彌平兵衛平宗  
清、京都の東方、  
六波羅  
平氏の居館が  
あつた。  
東山道  
畿内から東方  
山間の諸國を  
經て奥州に行  
く道。  
逢坂の關  
古の關所、山  
城・近江の國  
境にあつた。







去つた。

私はその山の影が見えなくなるまで目送してゐた。 (青葉若葉)

一九 スキーの面白味

スキーが日本に輸入されてから、もう二十年の歳月が経過した。<sup>Slice</sup>そして、最近非常な勢を以て隆盛に赴き、日本のスキ―選手も遠からず國際的競技に参加しようとする氣運にまで進んで來たのは、洵に喜ばしいことである。

スキーが我が國に始めて輸入された頃を顧みると、誠に今昔の感に堪へない。明治四十三年、<sup>(瑞典)</sup>スウェーデンに駐劄中であつた杉村公使は、同國の積雪地方ではスキーが既に軍

杉村公使  
名は虎一。



長岡外史

用として利用されて居るのを見て、非常に感心して、我が陸軍省へ二臺のスキーを送つて來た。陸軍省ではこれを最も雪の多い地方にある高田師團に送つて、その研究を命じた。そこで、當時の長岡師團長は自らその研究の衝に當つたが、何分にも始めてのこととして、道具の使用法さへよく分らず、その操縦には随分當惑したらしい。そして、兎も角スキーを足につけて滑つては見たが、却つて後へくと漕ぎ滑るといふ有様であつたから、その當

高田師團  
第十三師團、  
今は廢止され  
てゐる。  
長岡師團長  
名は外史。



時に於ては到底軍用に供するどころではなかつたのである。しかし、その後、<sup>オ</sup>墺國の參謀將校テオドル、レルヒ少佐の



ヒルレ、ルドオテ

來朝によつて、スキーの技術が傳へられ、またこれに關する種々の書物によつても研究されて、次第にその眞價も認められ、技術も進歩して來た。

スキーのやうな長い物を足に穿いて雪の上を滑り廻ることが、どうして面白いかと思ふ人は、試みにスキーを穿いて、あの軟い積雪の上を滑つて見るがよい。勿論最初は自由

には滑られず、轉ぶこともあるが、決して危険だと思ふやうなことはない。軟い雪の上のことであるから、たとひ轉んでも、クッションの上に身を投げるやうに、却つて愉快を感じるものである。そして、五間なり十間なり轉ばずに滑れるやうになり、次第に、不倒距離が増して來ると、興味が湧いて來る。それから廻轉や停止が出來初めると、非常に面白くなり、寒さを忘れて、汗みどろになつて、これに興じるやうになる。鮮かな廻轉をしたり、輕快な速力で滑走したりなどする夢を見るのはこの頃である。かうして次第にスキー術が上達して、練習場で制動、廻轉、停止などが稍完全に出来るやうになつたなら、種々な地形の



生地を滑り廻るがよい。そんな  
處では、また種々の技術を應用す  
る所に特別の興味がある。勿論  
技術が上達するに従つて、その面  
白味も増し、活動範圍も廣くなつ  
て、より長大な斜面や、より急な斜  
面を滑りたいやうになる。一里  
も二里も打續く長大な斜面を非  
常な速力で飛ばしたり、見事な連  
鎖廻轉で雪煙を立てて滑つたり  
することが出来るやうになると、



ス キー

スキーの味はもはや忘れようとしても忘れられなくなる。  
さてまた滑り疲れて、雪に飾られた針葉樹の森蔭に佇んで、  
澄み渡つた空に輝く雪の峰々を眺める氣持は、何とも形容  
することが出来ないほど愉快である。  
スキーはあらゆる運動の中で最も痛快で興味の多いもの  
である。それが運動の王として謳歌されるのも當然であ  
る。雪の少い都會地の人は、スキーをするのに態々雪國ま  
で出掛けねばならない不便はあるが、併し、旅をする楽しみが  
得られる。「いざ行かん雪見に轉ぶ處まで。」と芭蕉は言つた  
が、あの丈餘の積雪を見るだけでも珍しいに違ない。埃一  
つない清淨な空氣を雙肺に充たして、この爽快な運動を試

芭蕉  
松尾宗房、江伊  
賀國の人、元祿七  
年(一六九〇)歿  
俳人、元祿七  
年(一六九〇)歿



みるのは、如何にも健康的なことである。また雪國の人は徒に冬眠を貪ることなく、元氣に屋外で活動して冬を楽しむがよい。

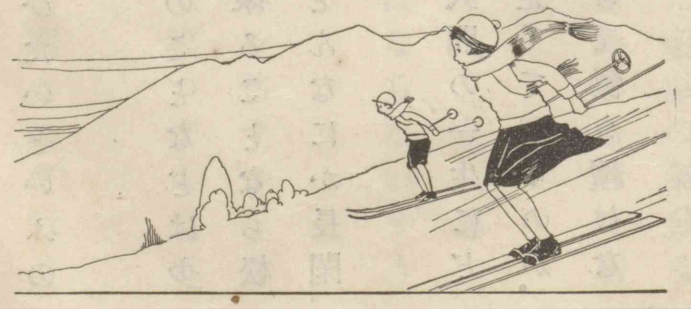
二〇 スキーマン 井上康文

雪、雪の山、また雪の山、王子が雪を踏みしめる。滑る、走る、飛び越える、中丁、雪を踏みしめる。痛快なスキーマンたちの顔、その晴れやかな顔、森の上の雪の平原、



井上康文  
名は康文、  
奈川縣の人、  
明治三十年  
生、詩人。

五千尺の山は丘の斜面、雪は新しい世界を生み出し、若人たちを勇敢にする。お、その新世界に於けるすばらしい快速力、滑る、走る、飛び越える、男女、男女、彼等はみんな純白な雪の上に、五縦横に愉快な途を描き出す。





二一 正月

三宅やす子

正月にはなるべく正月らしい気分を味はみたいといふのは、誰しもの普通に有する心持である。

私もこんなことを思ふ一人である。「仕事のことなどは少しも考へないで、せめて三箇日の間でも、出来ることなら松の内ぐらゐは、平和に過すことが出来たら、どんなにか長閑かだよいだらう。」と。

一體、忙しい／＼と思ひ續け言ひ暮らして、人間の一生にどれだけの仕事が出来たのか、また、しようと企てて居るのか。考へて見れば、さうまで肉體と精神とを虐げて働き續けなくともよささうに思はれる。

三宅やす子  
故郷學博士  
三宅方の妻、  
京都府人、  
明治二十三年  
生。

殊に日本の女に昔から恵まれてゐなかつた遊戯の気分、それは只一年中僅かに正月にだけ少しばかり與へられて居るではないか。  
「お正月にまでそんなに働かなくてもよからう。」と、女は思つて居る。「お正月からそんなに働かなければならないやうでは、一年中休む時はない。」とも思つて居る。  
とにかく、正月は、大人の女までが、追羽子に時を移すやうな心持になる時である、晴れ／＼と聲を出して笑つても見る時である。  
正月の重詰といふやうなものも、年を逐うて廢されて行くやうであるが、あれは家庭生活上可なり深い意味を有する



ものであると考へられる。常に行はしめられ、常に實行しようと思ひながらも實行し得ない家庭の簡易生活を、一年中最も目出たいとして儀式を重んずる正月に實行して、寒い時候であるのにも係らず、重詰の冷たい料理で幾日かを過した昔の人は、人間はさう何時でも眞黒になつて働き通せるものではないといふことを、自然に心得てゐたやうに思はれる。

若し正月に正月料理の準備をせずに、平日通りに暮らさうとしたら、主婦は元日からおかずの心配に悩まされなければなるまい。臺所はいつもの通り野菜の切屑などできたなくされなければなるまい。

正月には臺所の雑用がなくなつて、主婦も女中も輕やかな氣分に解放されるので、一家は面白い遊戯でも樂しみたいやうな心持になるのである。

こんな心持になる時が、一年の間には、現在よりも、もつと多く割當てられてもよい筈であつたのに、日本の女は、來る日も、來る日も、朝から晩まで、あくせくと働き續けて、家に居る時は、さつぱりとした着物に着替へもせず、家庭の仕事に一心になつて來たのであつた。そして、正月にだけ、ほんとなにたゞその僅かな間だけ息つきをして、何時も働き續けて來たのであつた。

思ふさまお正月氣分を享樂しよう、のんびりと數日を過さ



う。」かう思つても、  
 近來は一般に正月  
 気分が次第に少く  
 なつて來て、自分ひ  
 とりが正月気分にならうとしても、周  
 圍の空氣はやはり平日の騒がしさを失はないのは、少し物  
 足りない心持がする。子供らしい女の氣持だと思はれる  
 かも知れないけれども。  
 子供は今でも正月を樂みにして居るやうではあるけれど  
 も、それでも私達の幼い頃ほど正月に對する憧れは強くな



東京銀座の歳暮大出賣

いやうである。

私の子供の時分には、クリスマスChristmasの祝をすると、この忙しい  
 暮によくそんな暢氣な遊が出来るものだね。などと言はれ  
 たが、今日では、歳暮大賣出の飾よりも、クリスマスChristmas decoration、デコレ  
 ションの美しさが年々に増して行くやうである。

世界各国の心持の上に國境が除かれて、我が國民も西洋  
 人の心持を不自然でなく取入れるやうになつて、この頃の  
 子供は、昔の子供の正月に於ける樂みを、クリスマスと正月  
 とに二分して持つやうになつた。それだけ正月を待つ心  
 が薄らいだやうである。正月を樂しむ心持よりも、學校の  
 休暇になつたのを喜ぶ心持が強いかも知れない。



「旅に出て、汽車の食堂でお雑煮をたべても、さつぱりお正月気分にはならない。」と、或人が言つた。いつそ年の改まることを念頭に置かないために、暮から正月にかけて旅に出るのも面白いことであらう。今年こそ何かしなければならぬといふやうな、追ひかけられさうな活動欲を我から忘れるためにも、年末・年始に家を離れることは趣が深い。年々に一年の月日の過ぎて行くのが早くなるやうに思はれるのは、誰しも同じことであらう。遽しく送迎する年を思ふと侘しい心持になる。いつの間にか越したともなく、ぼんやりと年の瀬を越してし

まふのは、暢氣ではあらうが、さて、さうして何事もなく過してしまはうと思ふ人の心の奥にも、拒まうとしても拒みきれない越年の深い心持が動いて居るやうに思はれる。門松廢止、虚禮廢止、それがやかましい生活改善の聲ではなくとも、自然にさうしたことがふさはしくなるのは都會の正月である。

それとは違つて、田舎の正月にはそらに太古の静けさが忍ばれる。山から伐つて來た松竹を立て、自家の藁で作つた七五三繩なはを飾り、そして、神棚に神を祭るすがくしきよ。珍しくさつぱりとした布子ぬいごを着て茶を飲む人、大根膾で祝酒を傾ける人、ゆつくりと大きな餅を炙つて甘さうあまに食べ



る人。何となしに落着いて嬉しさうなのは田舎の正月気分である。

二二 ポンペイ物語

濱田青陵

ポンペイの遺跡發掘後、ギリシャ、イタリアの各地で色々の遺跡が掘り出され、アフリカの北岸ではチムガットのやうな遺跡が砂漠の中から出て來たにも拘らず、ポンペイの遺跡がやはり世界最大の一奇物として好評を博して居るのは、噴火で埋没したといふ悲劇と結びついて居るからだらう。紀元七十九年八月二十三日から二十六日に亙るヴェスヴィオ山の噴火が、一朝にしてナポリ灣頭のローマ時代

濱田青陵  
名は耕作、  
大阪府の人、  
明治十四年、  
考古學者、  
京都帝國大  
學教授、  
チムガット  
アフリカに  
於けるロー  
マ時代の  
市址。

ヴェスヴィオ  
またヴェス  
ヴィヤス(Vesuvius)と云ふ、  
ナポリ灣東  
岸の活火山、  
海抜四二〇  
呎。

の小市街を火山礫で鐘詰状態にして、これを十九世紀まで保存したのは、神明の不可思議な作業とでもいはいはうか。ポンペイ見物は、ナポリから電車或は汽車で日歸りて出來

る。何といつても今まで發掘さ

れた部分は全市の半分ぐらゐで、長さ四五町、幅三四町の小さい町であるから、吾輩のやうに、郵便配達夫の如く各戸を訪ねても、二三



濱田青陵

日かゝれば見盡される。まづ普通の見物客

濱田青陵自署

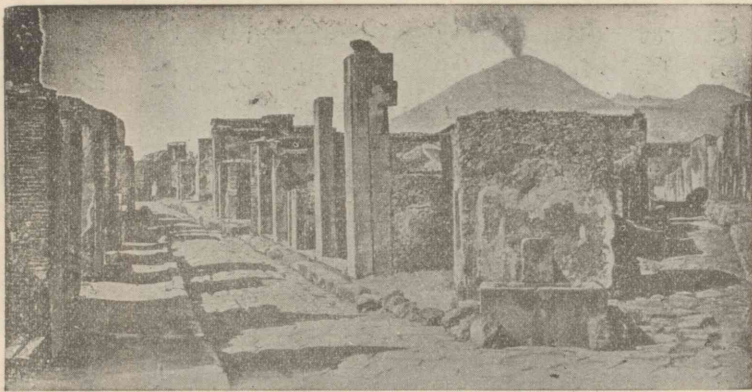
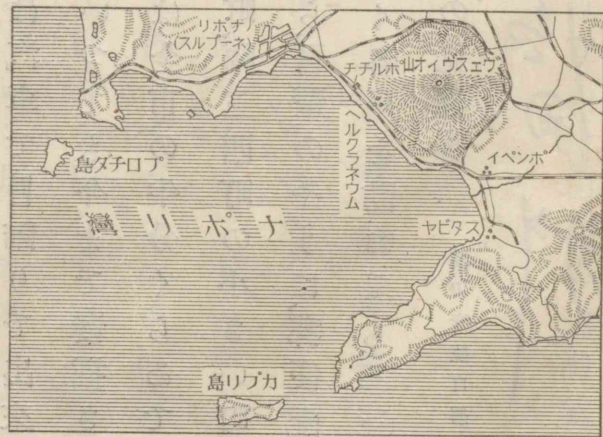
ならば、圓劇場、墓道、それから市内の中心フォラム、三角フォラム、浴

濱田青

ナポリ  
またネー  
ス(Naples)と  
云ふ。



場<sup>ヴェ</sup>チイの家、その他數軒と小博物館とを見れば澤山だ。珍しい遺物はナボリの博物館で見ればいゝ。また婦人や足弱の人のためには、擔<sup>カ</sup>ぎ椅子のやうなものがある。案内者は各國の言語を操るし、何の不便もないが、なかく、五月蠅<sup>カ</sup>い奴なので閉口する。吾輩もしたゝか彼等に附纏<sup>カ</sup>はれたが、どこの言葉でも話す。といふから、日本語はどうか。といったら、頭を搔いて遁<sup>カ</sup>げて行つた。

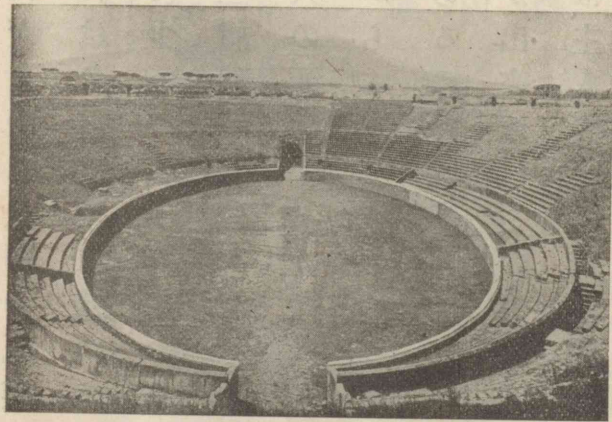


ポ ン ペ イ の 廢 墟

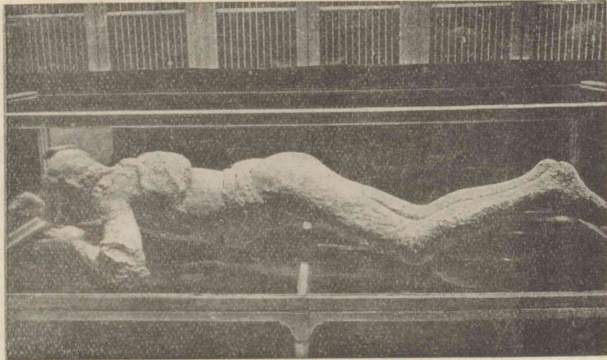
誰でも見たがるのは人間の死骸であるが、これは今日完全に残つて居るのは甚だ少い。ポンペイの小博物館に、二三體硝子箱に入れてある男女及び犬の死骸がある。人間の箱の下からも見られるやうに道が造つてあるので、好奇心を満足させることが出来る。この外、ヘルメスの家には、主人夫妻、二兒、二僕の死骸をそのまゝ現場に保存してある。大抵は手を以て目を被ひ、斷末魔の



苦みを現して居る悲惨な姿である。元來ポンペイの人口は、多く見積つて二萬ばかり。その内、今まで死體の發見されたのが二千ぐらゐるで、未發掘の部分から將來發見されるものを合せても、五千を超えないらしい。つまり、噴火の騒で大抵の人は逃げ出したが、礫灰を降らせるぐらゐで、案外急なこともないところから、慾張連中は再び家へ歸つて、荷物でも取出さうとしたため、次にやつて來た毒瓦斯のために死



場劇圓のイベンボ



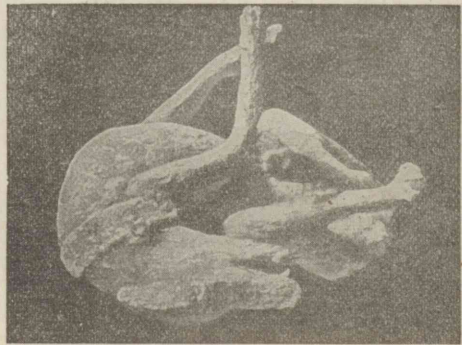
石化の體人

んだものらしい。尤も慾張でなくて、他の事情で逃げおほせなかつた人もあらう。それから、此等の博物館などにある死體の、白く、肉體の形まで存して居るのは、石膏で取つた復原であつて、その中に骨がはいつて居るのである。元來、灰や砂礫の間に埋れた人體の肉は段々腐つてしまふのに、外面の砂土がまづ以て堅くなるので、人間の形をした空洞が出来るのである。この空洞はちやうど石膏型の雌型であ



るが、發掘の際、これを破壊しないでうまく發見することは困難である。時々都合よく發見されて、それに石膏を注ぎこんだのが即ち我々の見るところの死體である。

市街の家々は皆屋根抜けであるが、壁畫や、モザイクや、その他の物はよく残つて居る。色々の彫刻や家具の類はナポリに移してあるから、現場には多く見られない。多くの家の中で最も見るべきものはヴェチイの家で、その壁畫はボンベイ第一の傑作である。この外、悲劇詩人の家、ファウンの家、サルス



石 化 の 犬 人

モザイク  
寄木細工。

トの家、外科醫の家など、一々擧げるに違がないが、銀婚式の家といふのがある。これは、千八百九十二年、イタリー王及び王後の銀婚式を祝賀するため、兩陛下及びちやうど賓客として來られた〔獨逸〕ドイツ皇帝及び皇后兩陛下の面前で發掘してお目にかけたので、さう命名されたのである。尤も初に一度掘つて置いたのを、再び態とらしく掘り出したといふことである。

\*Fiorelli フイオレリー以來の發掘法は舊式でよくないので、近來はナポリ博物館長監督の下に、新しい方法で、謂はゆる「新發掘」が行はれて居る。これは非常に精密に發掘して、一々發見物を現場に保存する方法である。この新發掘以來、我々は

フイオレリー  
イタリーの古  
物學者、ボン  
ベイを發掘し  
た。(1870)



更に新しい多くの事實を知ることが出来るやうになつたのである。

### 二三 發明界の偉人

米國は今日まで随分多くの世界知名の政治家や實業家を出した。そして、それらの人々は今日の米國を作るべくあらゆる努力を續けた。しかし、建國以來米國の持つたものの中で、トーマス・エジソンほど偉大なものは少い。否、單に米國ばかりでなく、世界の持つたものの最も大きいもの一つである。

エジソンは米國を科學的に偉大にした。同時に世界を電

天、氣象、物理、化學、  
世人、生理



ンソデエ、スマート

氣化した。彼は米國の一市民であるが、その事業は世界的であり人類である。政治家や實業家は、何よりも先に、自己及び自國の利益を圖り利權を獲ようとするけれども、彼はそんな褊狹な考を有してゐなかつた。たゞ科學的發明によつて、各國民に對して同様の便益愉快を與へようと心掛けた。實に從來知られなかつた自然力を利用して、人類の日常生活を便益



愉快にすることは、彼の一大使命であつた。そして、この使命は彼の驚くべき創造力によつて遂行された。即ち世界は彼を通じて電力應用の福音を得た。この意味に於て、彼は世界のエヂソンであつて、決して米國だけのエヂソンではない。彼の所有者たる米國が、これを國民の誇とするのも無理はない。

トーマス、エヂソンは、西曆千八百四十七年二月一日に、米國のオハイオ州Ohioに生れた立志傳中の人物で、列車ボーイBoyを振出し、世間のあらゆる辛苦艱難を嘗め、遂に幾多の世界的大發明を成就した。今日活動寫眞を知らないものはないやうに、またエヂソンの名を知らないものもなからう。恐ら

オハイオ州  
アメリカ合衆  
國の中央北  
部。

くエヂソンほど世界にその名を知られて居るものは少からう。ひとり米國だけでなく、世界は彼の偉業を徳として、知ると知らぬとの別なく、彼に對して等しく感謝の意を表して居る。彼の事業は國家の區別や人種の相違を超越して、全く世界的である。若し彼の發明がなかつたならば、世界はいかに日常生活の不便不快を感じるか測り知れない。彼は或點まで自然を征服し、そして電力を日用化した。彼の發明品中で最も世間に知られて居るものは、蓄音機・電話機・白熱電燈・電球・擴聲器・活動寫眞機メガホンなどであるが、この外にも、アルカリ蓄電池・磁氣選礦器を始め、手押車の改良など、殆ど數へき



れないほどある。中央政府に登録された專賣特許だけでも、千二百種類を越えて居るのを見ても、その一斑を察知することが出来る。

そればかりでなく、彼は世界大戦中更に化學藥品の製造を思ひ立ち、化學の研究に没頭した結果、軍需品として缺くことの出来ないアニリン油、アセチリン、ベンゾル液、ナフタリンなどを製出した。此等がどれほど有効に米國海軍に使用されたか、また米國海軍省がいかに彼を重用したかは、當時の海軍卿が彼を海軍諮議局長に起用したのを見ても解る。實に彼は驚くべき頭腦の所有者ではないか。若し世界に偉人と名づけるべきものがあるとするれば、トーマス・エジソンは確かにその主な一人である。彼は米國を益すると同時に世界をも益した。同じ世界的事業でも、彼の事業は政治家や實業家のそれと違ひ、一黨一派乃至一國一人種の興廢だけを念としないところ、に永久の價值がある。汽船の發明者フルトンを唯一の誇とした米國は、エジソンの世界的偉業によつて、精神的にも物質的にも一大光彩を加へた。第二のリンカンLincolnは將來或はまた出るかも知れないが、米國は果して第二のトーマス・エジソンを見るこ

海軍卿  
ダニエル



フルトン

フルトン  
米國の人。17  
69-1815)

とが出来たらうか。吾人は日本國民の名を以て、彼の偉

リンカン

リンカン  
アメリカ合衆  
國第十六代の  
大統領。1809  
1-1865)



業に對して深い感謝の意を表するのである。

明治天皇の御製

とこしへに民安かれと祈るなる

我が世をまもれ伊勢の大神

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

わが民草のうへはいかにと

霧を曉のねざめ静かに思ふかな

わが政いかゝあらんと

子らは皆戦の場に出ではてて

翁やひとり山田守るらん

四方の海みなはらからと思ふ世に

など波風の立ちさわぐらん

浅みどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

おもふことうちつけにいふ幼子の

言葉はやがて歌にぞありける



まごころを歌ひあげたる言の葉は、  
ひとたび聞けば忘れざりけり。

庭の木々に  
かたもし火の  
かざりなくかけ連ねたるやと  
火の  
つらも涼しく  
つらも涼しく  
つらも涼しく

明治天皇宸筆

よりそはんひまはなくとも文机の  
上には塵をすゑずもあらなん。

○ 家なしと思ふかたにもとし火の  
かけ見えそめて日は暮れにけり。

庭の木々に  
かたもし火の  
かざりなくかけ連ねたるやと  
火の  
つらも涼しく  
つらも涼しく  
つらも涼しく

二五 人のために盡す心

安井哲子

私どもはこの頃、諸所で、世の中が複雑になり、生活が非常に困難になつて来た。これからの人はよほど確ちかりせねばならない。といふ聲を聞きます。しかし、單に確ちかりしてゐる人といふだけでは、あまり意味が漠然としてゐて、どんな人を指すのか判断に苦しみますが、思ふに、それは、たとひ順境にゐても、調子に乗り過ぎて心を亂さず、また逆境に陥つても徒に悲觀せず、常に正しい人生の目標に向つて猛進し、その行路で出逢ふ種々の出來事は、皆精神鍊磨の好材料としてこれを善用する覺悟を持ち、また實際これを行ふ人を指していふのではあるまいかと思ひます。

安井哲子  
東京府の人、  
明治三年生、  
東京女子大學  
長。



安井哲子  
及びその筆蹟



# 犠牲奉仕

それならば、  
どうすれば  
こんな人に  
なれるかと

犠牲奉仕

いふに、どうしても一つの信念を持  
たねばなるまいと思ひます。私ど

〔基督〕  
Christ

もの學校は、御存知の通り〔基督〕キリスト教主義〔基督〕の學校ですが、こ  
れは必ずしも學生にキリスト教の信仰を強要するのでは  
なく、キリスト教の精神によつて、めい／＼がその天職を眞  
面目に盡すやうに導くのです。ですから、學生の中にはキ  
リスト教徒でない人もありますが、皆この教育の精神に同

學校  
東京女子大  
學

意してゐます。私どももまた學生と同じやうに、キリスト  
の生涯を手本として、萬難を排して正しい道を進まうとす  
る勇氣と、隣人を愛しようとする温情とを以て、その職務に  
忠實に、奉仕の生活を全うしようと心掛けながら、學生の友  
として、互に提携して同じ道を進んでゐますので、誠に愉快  
です。  
これらの學生は、皆その能力・趣味に應じて、自分の選擇した  
専門的學科を學んでゐますが、それは單に衣食住の資を得  
るためばかりでなく、その習得した學問を活用し、その境遇  
に應じて、家庭のために、國家・社會のために、また廣く世界人  
類のために、自分の最上の力を盡すためであります。



現代に於ける青年女子の知識欲は實に盛ですが、これを満足させようとするには、先づよく學問の目的を明かにし、生活の意義を考へて、その習得した知識を常に自他生活の改善・進歩のために活用するやうに心掛けねばならないと思ひます。このやうな希望を持つて居る婦人は、空虚な生活を好まず、常に充實した眞剣な生活を愛します。そして、人の妻として、母として、その夫や子供に對し、常に滿腔の愛を注ぎ、自分の心身を捧げて奉仕します。この愛は近隣に及び、延いては國家・社會に及び、更に進んでは世界人類にまで擴がつて、自分の持つて居る何物かを捧げようとするやうになります。かうしてこそ始めて世界の健全な精神的同

盟が出来るのであります。

米國では、世界大戦中、麥なし日や肉なし日などを定めて、國內に食料品の供給を豊かにするばかりでなく、更に供給の過剰を作つて、聯合國を補助しました。これは一家の主婦が、國家のため、また友邦の國民のために、精神的に聯合して、これを實際生活の上に現したものであります。これによつて見ても、私どもの家庭生活は、たゞに國家の經濟に大關係があるばかりでなく、世界的の關係さへ持つて居ることを知ることが出来ます。

私ども日本婦人も深くこの點を考へて、たとひ自分は小さくても、その關係するところは實に大きいことを覺つて、大



いに奮起せねばなりません。

目修文

二六 妹安藝子

朝吹磯子

安藝さん！ 安藝さん！！

あなたはあの暗黒な世界へ永久に旅立つて了ひました。私達は  
どうしてもそれが事實だと信ずることが出来ません。僅か十九年の短い生涯を、華やかに、そして、多くの人々から愛され  
たあなた。私はそれを寧ろ誇とさへ思つてゐましたのに、その安  
藝さんを一時に奪はれた私達親子兄弟姉妹の歎は、いつの世にか  
忘れられませう。

あの愛らしい顔、そして元氣な様子で、お姉様は？と少し早口にい  
つて、玄關からはいつて来る姿が、またしても目の前にちらついて

安藝子  
山口縣の人、  
陸軍中隊長岡  
外史の第三  
女、女子學習  
院中、大正十  
五年二月二十  
日生、自動車に  
日自、朝吹磯  
朝吹磯子の  
朝吹磯子の  
妻、安藝子の  
姉、明治二十  
二年生。

來ます。十九日二十日の土曜日曜、是非にといつて鎌倉へ呼んだ  
時、學校の歸りで、いつもの通りにこやかに、風呂敷包と、そして歐語  
會で弾くあのベートーヴェンのソナタの譜とを持つて、元氣よく

Beethoven

Sonata



子藝安岡長

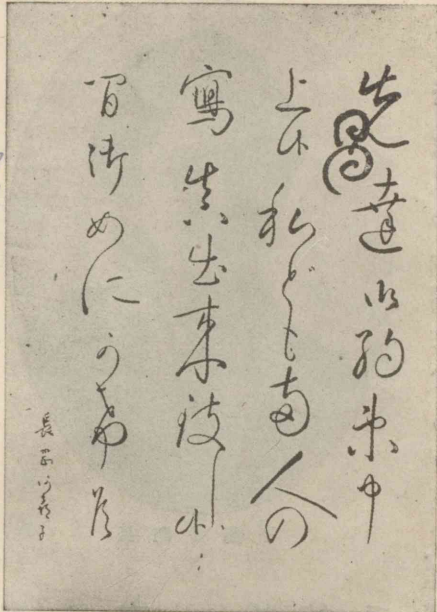
來てくれました。その時は京  
さんも來てゐました。京  
京さんは、大磯へ轉地してから  
は氣分がいゝといつて、訪ねて  
くれたのでした。何年ぶり  
で、姉妹三人が一緒に食事をした  
でせう。あの樂しかつた食事、

それが永久のお別にならうとは、誰がその時氣づきませう。  
私が代つてあげたい。」と、始終京さんの病氣を心配してゐたあなた  
は、いつになく元氣な京さんを見て喜んでゐました。そして、二十

十九日  
大正十年二  
月。  
歐語會  
女子學習院の  
生徒間に組織  
されてゐる演  
伎會。  
ベートーヴェ  
ン  
ドイツの作曲  
家。C170—1  
827)  
奏鳴樂。  
京さん  
男爵岡田武彦  
の妻、安藝子  
の姉、明治二  
十七年生。  
大磯  
神奈川縣。  
始終  
いつも。



二日は一兄さんの誕生日だから何かあげたい。といつて、二人で町へ行ききましたね。何も無い鎌倉で、あれこれと二人で選った数種の食料品をお送りした時



長岡阿喜子筆蹟

一番敬慕してゐた一兄さんと、去年の秋お別れしてからあなた胸には絶えず悩みと淋しさがあつたことを、日記に、歌に、女中の話によつて、漸くこの頃知りました。私はあなたのその歎き悲み

一兄さん  
名は護一、明治二十五年  
男、外史の長年  
支店、三井銀行  
支店、當時大阪  
支店、在勤

先達御約束申  
上候私ども兩  
人の寫眞出來  
致し候間御め  
にかけ候  
長岡阿喜子

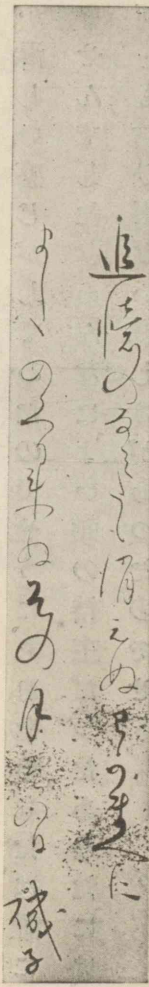
が事實になつたことを悲しみます。敬慕してゐた兄さんの永遠の別、それはどんなに悲しく感じられたこととせう。そして、日記にも、十九の年に幸あれ、厄年の十九に幸福あれ。と、繰返し、誌してあつたのを讀んだ私は、怵へられなくなつて、讀んでは泣き、泣いては悶え、一晩中あなたのお棺の前で泣きました。きつとく何か淋しい感じがしてゐたのでせうに、それをあなたは誰にも話しませんでした。あんなによい頭の持主だつたあなたには、きつと何とも言ひ得ない淋しさがあつたのでせう。  
あなたはキリスト教を信じて、何事も運命と諦めて、心に鞭打つてゐたことを日記で知りました。信仰のない私は、安藝さんのやうな可愛い人の最期があまりに酷かつたことを呪はずにはゐられません。運命といふよりも、あまりに頻繁に起る事故ですから。安藝さんが亡くなつて僅か一二日おいて、二十五日の朝、私どものお

厄年  
災難のあると  
いふ年齢。

頻繁に  
しきりに。



友達のお子さんが、通學の途中、茅場町で同じ徑路で亡くなられ、續いて三光町で知人のお息子、また私どものお友達といふやうに、多くの方々が文明の利器に傷はれたことを深く悲しみます。交通整理の完全でない、しかも道路の狭い東京の町を、無鐵砲な運轉手によつて自動車走り廻されることを、ほんとに恐ろしく感じま



朝吹磯筆蹟

す。私どもは、安藝さんの死が無意味でなく、この後は、道行く人も、自動車に乗る人も、また運轉手も、各自よく注意して、この夥しい交通の事故が少しづつでも少くなるやうにと祈つてゐます。安藝さんは、元氣な、優しい、そして實行の人でした。私どもの子供の面倒までもよく見てくれました。或時は親以上に、學校の復習

茅場町  
東京市日本橋  
區。三光町  
同芝區。  
利器  
便利な器械。

追憶のなみだ  
も消えぬわが  
まへにまため  
ぐり來ぬその  
月その日  
磯子

各自  
夥しい  
多い。

に、運動に、ピアノに、よく導いてくれました。風呂にまで赤ちやんを入れてくれました。その親切な優しい若い叔母さんを失つたことは、私どもの子供のためにも限りない悲みでございます。大きい子供は安藝さんのお話の出る毎に泣きます。確かに私どもの子供のためにも、非常な歎でございます。けれども、子供は安藝さんの残して行つたお手本によつて進んで行くでせう。安藝さんどうか安らかに。

あまりにも悲しき現いまもなほ、

たゞ夢のごとまぼろしのごと。

母の姿とみに老いしが目につきて、

またも涙にむせぶこのごろ。(妹安藝子)

母  
名は芳子。

村上浪六  
名は信、堺市  
の人、慶應元  
年生、小説家。

二七 殿中の刃傷

村上浪六



元祿十四年三月十四日、大禮の終として、白書院に將軍勅答の式日、閣老有司の面々はもとより、譜代外様あらゆる諸侯の總登城は巳の上刻。千代田の春に武家の莊嚴を極め、關



六浪上村

東の聲望、柳營の威儀、廣々たる殿中、今日を晴と出仕の席に従ひ順に就いて、勅使院使の御登營を今か今かと待ち受けぬ。別けて今日は公武周旋の典禮作法に出頭第一の老功たる吉良上野介、松の御廊下口を控へし一室の正面に着座して、我なくばと四方を見廻す體。鬼畜に總身の肉を食まるゝ如き心地しながらも、遁るゝ道

元祿 東山天皇の年號(三寶一三) 白書院 江戸城居間の名、上段下段の二間がある。將軍 此の時の將軍は徳川綱吉。

吉良上野介 名は義央、徳川幕府の高家。

なき淺野内匠頭、恐るゝその前に迂り出づれば、じろりと見て、

「ほう、昨日の問合に、『長は無用。』と申した上野の一言、今日ばかりは神妙に守られて、烏帽子大紋を召されたな。萬事その通りに致さるれば、この程より度々の御失體もないはずぢやに。」

「お言葉謹んで有難く承ります。就きまして、内匠なほ一應差當りお指圖を。」

「なに、差當つての指圖、いかやうの儀でござるの。」

「今日の御儀式に、傳奏方御着の砌、内匠のお役目として、お玄關の式臺にお迎へ申上げませうや、たゞし御式臺下に

淺野内匠頭 名は長矩、播州赤穂城主。



てお迎へ申上げませうや、お指圖下さりまするやう。」  
上野介さも訝しげの顔色。

「これは以ての外怪  
しからぬ。内匠殿、

お場處柄も辨へず、

今日この老人を愚

弄せらるゝか。」

あまりの案外に、内匠

頭はつと驚きの面を

擧ぐれば、その面上に冷笑の聲を含みて浴びせかけ、

「この上野を愚弄するでなく、若し眞實この場合に差迫つ



(フラグヒサア) 央義良吉と矩長野淺の劇

て、さほどのことも御存じないとすれば、上を欺いて今回  
の大役を申し受けられたも同然。指圖も指南も事によ  
りけり。五萬<sup>\*</sup>三千石の大名、それで御用が勤まると思は  
るゝか。疎忽千萬。」

さらぬも堪へがたき連日の遺恨に、夜の目も合はず無念の  
涙を呑み、たゞさへ忍びがたき鬱憤に、頬は瘦せ顔は蒼ざめ  
ながら、重ねたの恥辱も御奉公大切の一念に、元來の癩癬<sup>かたせき</sup>  
短氣を抑へ來りしに、今また五萬三千石の祿盜人<sup>ぼろきり</sup>といはぬ  
ばかりに辱められし内匠頭、そのまゝ伏して座を動かねど、  
びたりと支へし兩手は我を忘れて拳を握り、頭を垂れし烏  
帽子は次第に打震ひ、鷹の羽の大紋は袖に漣を寄するが如

五萬三千石  
正保二年七月  
長矩の父淺野  
長直が赤穂五  
萬三千石に封  
ぜられた



ひ。さもこそと心地よげに座を起ちし上野介、  
をりしも、將軍家の生母たる桂昌院の御使番として、大奥よ  
り急ぎ足に來りし梶川與三兵衛、かくとは知らず、内匠頭に  
向つて御用の打合せ。

「これは幸ひ淺野殿、上様御勅答の御儀式相濟みましたる  
節は、その旨この梶川までお知らせ下されまするやう。」  
松の御廊下を三四間の彼方まで去りし上野介、俄に振返り  
て立戻りぬ。

「梶川殿、何の御用かは存ぜぬが、桂昌院様よりとあらば、上  
野承らう。そこに居られる内匠殿では、作法萬端一向お  
解りにならぬ御人、心元ない。ありや近頃若耄碌せられ

桂昌院  
家光の中萬、  
本庄宗利の養  
女。

「たげちや。」

伏したる内匠頭、むくりと起ち上るや否や、大原實盛のあまがたな小刀  
を抜く手も見せず、電光石火の勢、帛を裂くがごとき癩癬の  
一聲、

「おのれつ。」

躍りかゝつて上野の面上眞二つと打ちこみしが、あまりの  
悲憤に氣は焦りて拳は伸びたり。恨の切先は流れて、がち  
りと烏帽子の鐵輪。

「無念。」

と踏みこんで、仆れし上を二の太刀に斫り下げし後より、梶  
川與三兵衛むずと羽搔締に組みつきぬ。

大原實盛  
古刀の鍛工、  
年代・住處と  
もに不詳。



「お場處柄でござるぞ。亂心、亂心。」

内匠頭遁げ行く敵に血眼を注いで、さながら五臓六腑を絞

り出す聲。

「ら、ら、亂心はいたさ

ぬ。武士のお情、お

慈悲、お慈悲つ。」

いかに荒れ狂うて振

放さんとするも、いか

に藻搔いて追はんと

するも、梶川與三兵衛は七萬騎中に聞えたる六尺有餘の大

力無雙。あはれ、内匠頭は元來の瘦形に連日連夜の疲れ果



(フラグヒサア) 矩長野淺の劇

てし身。看すく、眼前に長蛇は逸せり。

殿中は鼎の沸くが如く、上を下への大騒動。

間一髪、吉良上野介は危き命を拾うて、馳せつけし品川豊後

守に助けられ、お坊主の肩に掛けられて、高家衆の詰所へ連

れこまれしが、日比の權威傲慢に似合はず、息も絶えく、な

る老眼に血を浴びて連れ行かるゝ時、お典醫、お典醫、と聲を

顛はせながら夢中に唸りし體、あまりの見苦しさと小氣味

よさと、出逢ひし諸侯いづれも微笑を含みぬ。

文章深奥、いたゞはれ、世に浪  
世上一名、深きその人  
ぞなき、なみろく

蹟筆六浪上村

文章誤得、世上一名、いたゞはれ、世に浪、深きその人、ぞなき、なみろく







だんく強まり高まつて行く。  
 冷たい風はいつか消えて行き、  
 明るい歡は天地にみなぎり、  
 道行く人は夥しい群となり、  
 人々の顔は輝き、  
 その眼は美しいものを見て居るやうに、  
 麗しく大きく清らかに見開いて、  
 深い慈愛があふれ、  
 希望の方へ勇んで行く。  
 お、勇ましく美しい朝よ、  
 太陽は等しく人々を照らし、

光を喜ばぬ人はなく、  
 天地は歡喜に燃えて居る。(日本現代名詩集)

二九 菅公夫人

山田新一郎

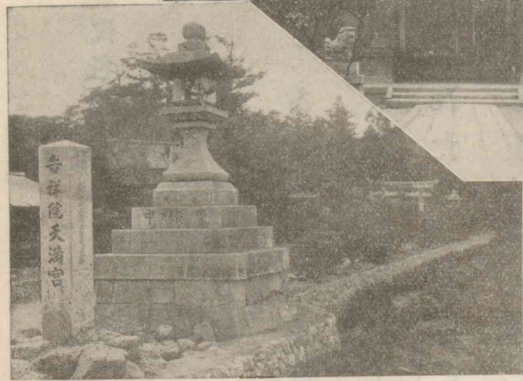
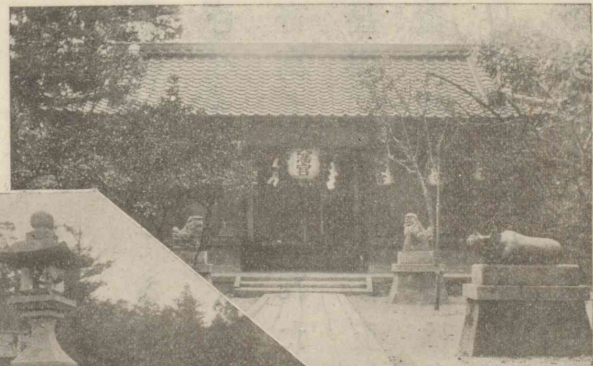
菅公夫人は北野神社の西の御座に祭つてある。夫人は菅公に別れて數年の後には、住むべき家もなくなり、吉祥院といふ菅家の菩提寺の一室に寄寓して居られたので、普通に吉祥女と稱へられて居る。昌泰二年、夫人が五十歳に達した時、醍醐天皇がわざ／＼祝賀の勅使をお遣はしになつて、從五位下をお授けになつたといふ外には、夫人の傳記は傳はつて居らないが、當時有數の賢夫人だつたことは想像す

山田新一郎 福岡縣の人、元治元年生、北野神社宮司。  
 菅公 菅原道真。  
 菅公夫人 鳥田宣來の女。  
 北野神社 北野の天満宮、北野の天神などともいふ、官幣中社、京都市上京區にある。  
 昌泰 醍醐天皇の年號。(一五八一—一五二〇)  
 醍醐天皇 第六十代。從五位下。後には從四位下に敘せられた。



るのに難くない。菅公のお  
子方は大勢あつたが、上の方  
のお子方は四人までも相當  
の位置に出身してゐたので、  
菅公と同時に諸國に流され  
た。お子方が揃うて相當の  
位置に出身したのは、夫人の  
訓育も與つて力のあつたこ  
とと思はれる。

\*延喜元年一月二十五日、菅公が俄に太  
宰權帥さいごんのさうに左遷させんされて、二月一日いよいよ



↑ 吉祥院天満宮  
← 吉祥院天満宮  
の参道

延喜  
醍醐天皇の年  
號(二卷一五  
八三)  
太宰權帥  
昔筑前國にあ  
つた太宰府の  
役人。

よ都を立つて筑紫へ行かれる時、

東風ふかば匂おこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ。

と詠まれたのは、草木に寄せて最愛の夫人に離別を惜しま  
れたのだともいへよう。西遷の道すがら、都への便りに  
ことづけて、

君が住む宿の木ずるをゆく／＼も、

隠るゝまでにかへり見しはや。

と盡きぬ名残を惜しまれたのも、即ちこの夫人に對してだ  
つた。以てその琴瑟の情も偲しのばれるのである。  
夫人が京都の留守邸に於ける獨居の様子は、菅公の作られ



た太宰府の詩で多少窺はれる。公が太宰府で衣食住ともに缺乏し、悲惨極まる二箇年の月日を送られたのに比べて、



(巻繪起縁神天野北) 眞道原菅の所配

京都の方もまたこれに劣らぬ境遇だつたことは想像するに難くない。菅公の太宰府で詠まれた詩の中に、「雪夜家竹ヲ思フ」と題して、  
「家僕ハ早ク逃散シヌ。寒ヲ凌ギテ誰カ掃撒セン。」  
といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた様子だが、雪押竹ゆきおしだけの雪を拂ひ除けるものもあるまいと、故郷の

ことを氣遣つて居られる。この詩は、延喜元年即ち<sup>\*</sup>去年、今夜の詩を詠まれた年の冬の作である。一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも大臣暮らしで育つたお子方は大勢ある。留守居の夫人の苦勞が一通りや二通りでなかつたことは申すまでもあるまい。こんな困難な家、しかもお咎を蒙つた菅家のことだから、はしたない下男どもも早々に逃げ出して、權門に奔つたものと思はれる。夫人はこんな困難を凌いで、お子方を相手に留守を守つて、氣丈夫に家政を齊へ、夫を大事に思つて居られたことは、次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として現れて居る。これも延喜元年冬の作と思はれるが、家書ヲ讀ムと題して曰く、

去年今夜  
去年今夜侍  
清涼、秋思詩  
篇、獨斷、賜、恩  
賜、御衣、今、在、  
此、捧持、毎日、  
拜、餘香。



「消息寂寥タリ三月餘、便風吹着ス一封ノ書」

三月餘も都の便りが絶えて、甚だ寂しく感じて居つたが、今日はいかなる吉日ぞ、東の風が我が家の手紙を吹きつけて來た。實以て嬉しいことである。

「西門ノ樹ハ人ニ移シ去ラレ」

これから以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠まれたものである。右大臣家の表門内であるから、松か梅か立派な樹が植ゑてあつただらうが、



北野神社

今はその樹を人が持ち去つて行つた。多分米鹽の代に樹を賣つたか取られたかしたのだらう。

「北地ノ園ハ客ヲ寄居セシム」



山田新一郎

天神御所の北地といへば紅梅殿

だらう。「客ヲ寄居セシム」とある

から、こちらの方は借家か下宿に

出されたものと見える。庭木の

賣食ひに下宿業、これが昨日まで

右大臣として天皇の寵遇の斜でなかつた菅公の夫人の生計の有様である。太宰府の菅公はどんな心持でこの手紙を讀まれただらうか。



「紙ニ生薑ヲ裏ンデ藥種ト稱シ。」

昔の草根・木皮の薬には、生薑の配煎が必要とされたのだが、いはば生薑は家庭衛生の必需品である。「たまに生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏しておきました。」困難の中でも、一物も苟くもせられぬ夫人の用意のほどが知られる。

「竹ニ昆布ヲ籠メテ齋儲ト記ス。」

内のお祭のお供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布を貰ったからとて、お子方の總菜にもされずに、直ちに竹筒に入れて、お祭の時の神饌しんせんの用として仕舞つて置かれたといふのである。

以上の四句は、千言萬語よりも明かに、京地に残された菅公一家の

山田新介

何と

山田新一郎自署

生活状態を菅公の筆で現して居る。いふ悲惨な境遇だらうか。その反面には、夫人が凜乎たる決心を以て、百難を排して生計の方法を講じ、缺乏の中に祭事を大切に、薬餌やくじの果までも注意して居られるといふ、誠に行届いた齊家の有様があり、と見えるではないか。  
①「妻子飢寒ノ苦ミヲ言ハズ。コレ還ツテ余ヲ懊惱セシムルヲ愁フルガ爲ナリ。」  
留守宅の現状は前のやうであるが、それをたゞその通りの事實として報じただけで、その餘は、徒に夫を心配させまい

薬餌

(くすりかじ)



とてか、自分や子供の飢寒に迫られて困つて居る愚痴は一言もいうては来ぬ。言はないどころか、お留守はとにかくどうにか遣つてゐます。」と、却つて安心を求めて来る雄々しさは、なかく、並々の婦人に出来ることではない。榮華をこれ事とした當時の婦人社會では、指を屈すべき第一人だつただらう。實に昔公の夫人たるに恥ぢない人といふべきである。(梅花遺芳)

自修文

三〇 子供と其の父

武者小路實篤

子供「お父さん、私は學校へ行くのが厭いやになりました。だつて、皆が

武者小路實篤  
子爵武者小路  
公共の弟、小  
京市の人、東  
治十五年生、  
文學者。

私の事を『先生の花』と言つていぢめるのですもの。私が一番なのも、私が出来るところではなくて、私が先生のお氣に入りだからだ、私が先生におべつかを使つてお氣に入るやうにするからだと言ふのです。花と云ふのはヒイキと云ふ事なのです。ヒイキと云ふ字が集つて花と云ふ字になるでせう。ですから、私は或時先生にさう言ひました。『皆が、私の出来るのは、本當に出来るのではなくて、先生のヒイキがあるからだ。本當の實力から言ふと、私は五六番以上にはなれない人間で、たゞおべつかを使ふ事がうまいので、私が一番になつて居るのだつて言ふのです。先生、それは本當ですか。本當なら、私を五六番に下げて下さい。私は勉強して、自分が本當に出来る人間だと云ふ事を示しますから。』つて。すると、先生は笑ひながら、『そんな事は氣にしないが、出来る生徒は皆出来ない生徒からさう思はれるものだ。併し、そんな事で参つて

参る  
閉口する。



は駄目だ。言ひたい人には何とでも言はせて置くが、世の中に出ると、もつと意地の悪い人が居る。私達はそれを恐れては駄目だ。そんな意気地のない人間は、いくら出来ても、偉い人間にはなれない。何と言はれても、自分の方さへ正しければそれでいいのだ。皆にそれが分つて貰へないでも、それは氣にしないがいい。孔子と云ふ支那で一番偉い人は、人に色々の事を言はれるのを氣にして居る人に、自分を省みて、疾しい所がなければ、何も心配する事はないと仰つた。あなたもさう云ふ覺悟で居らなければいけない。と仰つた。私はそれを聞いて、元氣になつて、皆に何を言はれたつて平氣だ。自分はそんな事は恐れはしない。さう思つて居るのです。所が、意地の悪い生徒が居つて、それに又おべつかを使つて色々の事を言ふ人もくつついて、私を見ると、花が来た、先生の花が来た、臭い汚い花が来た。と言ふのです。そして、昨日晝休



武者小路實篤

に歸つて來ると、机の上に花の畫が描いてありました。そして、こんな事を聞えよがしに言ふのです。『出来ないで出来るもの、なかに。』花。私は腹が立ちました。口惜しくもありました。だけど、怒る譯にも行きませんでした。聞えないふりをして、孔子の仰つた言葉ばかり考へてゐました。皆自分の駄目になる事を望んで居るのですね。だけど、私は駄目にはなりません。それが口惜しいのです。殊に二番に居る人が力が強いので、皆其の人におべつかを使ひます。皆は其の人に意地悪をされるので、私の側に來られないのです。意地悪に負けるやうな人は、私は嫌ひだから、私もさう云ふ人とはつきあひたくはないのですが、學校に行くのが段々厭になつて、是では困ると思



つて居るのです。學校はいくらでもあるのですから、外の學校に移つたらどうかとも思ふのです。外へ行けば、こんなに酷い目には逢はないでも濟むと思ふのです。

父「お前がさう思ふのは無理だとは思はない。併し、何處かへ行けばいゝ處があるかも知れないと云ふ心掛はよくない。それより、今にお前の本當の友達が、お前の級から出る事を信じて勉強して行くがいゝ。もう少しで、きつとお前には本當にたよりになる友達が出て来るに違ない、お前さへ間違なく立派にやつて行くなら同じ孔子の言葉に徳のある人は獨りぼつちになる事はない、必ず友達があるものであるとある。お前も自分の學問が出来ると云ふ事を自慢しないで、——お前の自慢にして居らぬ事は私も知つて居るが、——そして、間違のない道を履んで、僻んだり恨んだりせず、人を信用し、いゝ人が必ず居ると云ふ事を信じて、少しでもい

厚意  
親切。

い所を持つて居る人には厚意を持つやうにして行くと、きつとい友達が出来、そして、お前が本當に立派な人間で、決して先生に媚びたり諂つたりしない、學問の本當に出来る人だと云ふ事が、皆に分り出すに違ない。それは、二三の人は何時まで経つても、お前の悪口を言ひ、お前を誤解させようと骨折し、其のためにはどんな事でもするかも知れない。だが、先生も仰る通り、そんな事は氣にしないで、黙つて居つても、お前を知つて愛して居る人が何處かに居つて、其の人がお前の公明正大な人間だと云ふ事を腹の底から知つてくれる事を信じて、何と言はれても平氣でもつと立派な人間にならうと骨折るのが一番偉いのだ。尤も無理をしては駄目だ。早く偉く思はれたかつたり、早く自分が正直な人間のやうに思はれたかつたりしては駄目だ。それは、休へるだけ休へて、休へきれないまで休へて居る内に、少しづつ芽が出て来るのだ。お父さん

誤解  
思ひがち。



だつて、随分悪口を言はれた事も、中傷された事もある。山師だと言はれたり、偽善者だと言はれたり、賣名漢だと言はれたり、新聞でたゝかれたり、心ある人にさへ背かれ、親友にまで無氣味な疑を抱かれかゝつた事もある。希望を失ひかけ、人間に愛想をつかし、何をしても始まらないと思ひ、うるさい事が厭になつて、淋しく家に一人で閉ぢ籠つて居りたいと思つた時であつた。併し、さう云ふ時でも、お父さんは、「是はいけない、是は墮落だ。自分の徳の足りないことを忘れて、他人をたよりにする罪だ。他人に何とか思はれたり言はれたりして、自分の値打はそれで上り下りするものではない。自分の値打は只他人に悪口を言はれて淋しくなる時に下り、他人に何と思はれても自分さへ正しくして居ればいゝと思ふ時に上るものだ。」と云ふ事を本當に知つて居つたから、それに打勝つて此處まで來た。是からも度々そんな目に逢ふだらう。だが、

中傷 他人の事を殊更に悪いやうな名譽を傷つけること。  
山師 詐欺師。  
賣名漢 實の伴なはぬ名を求めぬ男。

怖いのは自分を其の爲に賤しくする事だ。そんな目に逢つても、

### 武者小路實篤

武者小路實篤自署

自分を益、貴くする事が出來たら、それは此の上も、ない名譽な事だ。お前は苦しいだらう、また淋しいだらう。だが、私の子として、私よりもつと立派な人間になつてくれる氣なら、そんな事には驚かないでくれ。そして、立派な人間になつてくれ。正しいと思ふ事をする時には出來るだけ大膽で、不正な事に對しては飽くまでも臆病であつてくれ。そして、どんな時でも自棄を起さず、恥ぢるべき事を恥ぢる代りに、恥ぢてはならない事を恥ぢずに、立派に生きてくれ。心を僻ましてはいけない。お前の友達はきつとお前の學校に居る、お前の級に居る。いくらお前の値打を低く皆に思はせようとする者があつても、心配することはない。眞價は一寸の隙間からも洩れて他人の心に觸れる。覆ひ盡され



る心配はない。」

子供「お父さん、私はもう誰に何と言はれても恐れませんが、先生とお父さんとは私を知つて下さいますから。」

父「お前を本當に知つて居る者は、私でも先生でもない。それは見えない處に居る或者だ。それはお前の心の内に居つて、恥ぢるべき事と、恥ぢてはならない事とを教へる者だ。そして、恥ぢるべき事は決してしないやうにし、恥ぢてはならない事をするのに勇ましく、恐れないやうにする者だ。さあ學校へ行つてお出で。花と言はれる事は恥ではない。媚びたり諂つたりする事も恥だが、媚びたり諂つたりしないのに、するやうに思はれるのを恐れるのも恥だ。他人の蔭口をきいたり意地悪をしたりするのは恥だ。中傷するのはなほ恥だ。だが、蔭口をきかれたり、意地悪をされたり、中傷されたり、誤解されたりする事は恥ではない。それを恐れる

のは恥だ。それに耐へそれに動かされないのは實に誇だ。行け、我が子よ。恥かしくない人間になつてくれ。友達は必ず出来る。出来ないでも恐れない者には、必ず友達出来るものだ。其の人間當の友達出来るものだ。それは鏡に自分の姿が映るやうに間違のない事だ。」

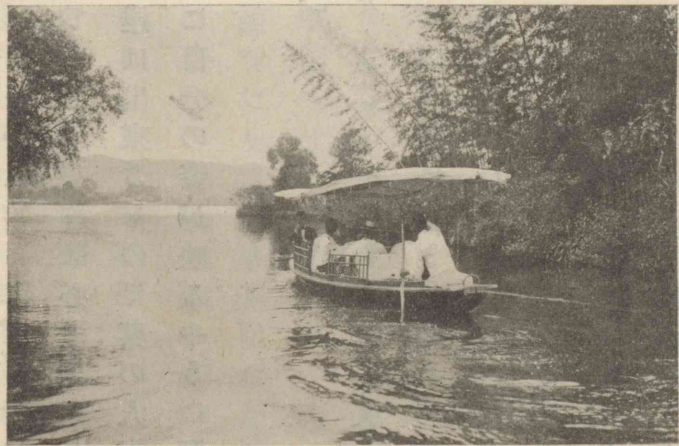
子供「お父さん、それでは行つて來ます。」

父「行つてお出で。(我が子の後姿を見えなくなるまで見送つて涙ぐみながら)お前の一生も樂ではあるまい。だが、立派に生きてくれ。神よ、私を守つて下さるやうに、子供を守つて下さい。どうぞ、子供を幸福にしてやつて、勇氣を失はないやうにして下さい。良い友をお與へ下さい。私の過を赦して下さるやうに、子供の過をも赦して下さい。そして、私以上にお役に立てて下さい。だが、幸福にして下さい、若しお赦し下さるならば。」(二本の枝)



三一 南船北馬

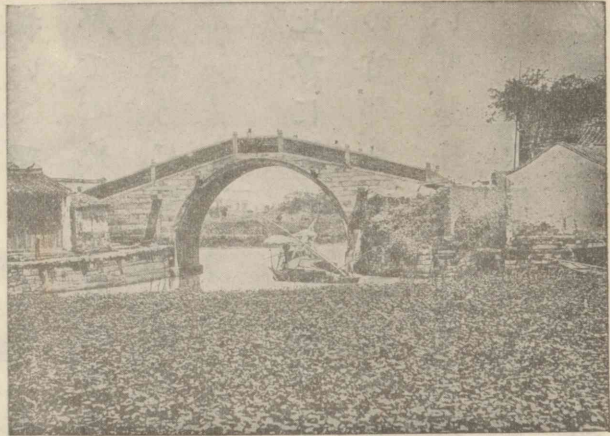
杭州に参りました。長堤の柳が緑に煙り、雷峰塔も朧に霞んで居ります。天竺参りの道者が首に黄色い袋を下げ、富んだ者は輿に乗り、貧しい者は徒歩で、三々五々過ぎて行きますのも長閑かな景色でございます。併し、大きな橋は自動車が行けるやうに新しく改造され、寺な



西湖の畫舫

津輕照子

津輕照子 伯備小笠原長幹の妹、明治二十二年生。杭州、支那浙江省塘江口に近き名所、西湖にあり。景は有名である。長堤、雷峰塔を指す。蘇公堤に西湖十景と云ふ所である。



蘇州の風橋

を漢口へと溯つて居ります。遠しい旅には珍しく落着いた日でございます。下の船室で支那人の吹く笛の音

ども白壁に塗り替へられてゐて、支那固有の風光が見られるといふ期待は少し裏切られた気がいたします。それらよりも、此處に参りますまでの汽車の沿道に、却つて畫にしたいやうな處が澤山ございます。

二 昨朝南京で船に乗り、只今長江

南京 支那江蘇省西部の都會。長江 揚子江。漢口 支那湖北省、揚子江沿岸の都會。



に聴き入つたりなどして居ります。蘇州蘇州は水の街で、畫  
江蘇省東南部  
の都會。によい處でございます。二日間畫舫（はくほう）に乗つて橋や寺を  
描いて廻りました。南京は流石に大きなのんびりした  
都で、心地よく見物することが出来ました。揚（やなぎ）の花が雪  
のやうに霏々と散るのを、美しくも淋しくも眺めました。

三

北京北京支那の首府。に滞在して居ります。さすがは古い歴史を持つ國  
の首都、見る物毎に心を惹かれます。黃釉（くわうい）の瓦の嚴めし  
い紫禁城を見ますと、民國といふ名はこの國にそぐはな  
いやうな氣がいたします。清朝時代の王公方にもお目  
に懸り、その邸宅をお訪ねもいたしました。が、そゞろに涙

が催されました。一昨日北京名物の黃塵に出遭ひまし  
たが、實に凄じく、話の種にはなりません。が、實際はたまら  
ぬものでございます。

三二 春

加藤 武雄

神嘗祭の頃になると、山茶花の花が咲く。山茶花の花が咲  
く頃になると、家の庭から眺めやられる國境の連山の頂が、  
斑に雪を置き初める。

「お、寒い。寒い筈だ、今朝は山に雪が來たぞ。」  
かう言つて遠山の雪に瞳をあげる心持、あのきいと心が引  
締まるやうな新鮮な心持は、山國に育つた人なら誰でも經

加藤武雄  
神奈川縣の  
一人、明治二十  
一年生、文學  
者。



驗する所だらう。

その山の雪が朝毎に白い部分を増して行つて、やがて眞白になる頃には、「富士隠し」と私達が呼びならはしてゐた一際



加藤武雄

高い峰の肩の所にある富士山が、ひよつこりと額を覗かせる。多分光線の具合なのだらうと思ふが、その頃、私達は、富士山に雪が積つて、それだけ富士山の背丈が高くなつたのだとばかり思つてゐた。梯形になつて居る頂部の一角だけが、ほんのちらりと見えるだけなので、勿論八朶の花に喩へられるあの全容を髣髴すべくはなかつたが、

それでも、俺の村からは富士山が見えるぞ。」と、隣村から來る學校友達に向つては、それを自分の物のやうに自慢したものだつた。

が、その富士山も、寒い盛りの三十日か四十日の間、ちらりと額を見せるだけで引込んでしまふ。背伸びしてちらと覗いて見た。——まあ、さう言つた感じなのだ。富士山が見えなくなる頃には、山々の雪も消えそめて、にほやかな紫紺の山肌が、光を含んだ藍色の空にほのめく。どうかすると、その山々の輪郭が、一抹の夕雲に溶けこんでしまふ。すると、その夜から降り出した柔かな雨が、二日も三日も降り續く。それがあがると、もう春なのだ。北相模の高原の山裾の村

村  
井神奈川縣津久  
井郡川尻村。



には、かうして春が訪れるのだ。

春が深くなるとともに麥が伸びて、桑が芽を吹く。麥畑桑畑の間を帯のやうに伸びた野道を十二三町、二つ三つの部落と一つの驛とを通り抜けて、その驛の外れの高臺にある小學校へ、私は尋常科を四年間、高等科を四年間、前後八年間通つたのだつた。

私は偏窟な子供だつたので、往きにも返りにも、友達の群を離れて一人の時が多かつた。私は一人寂しくその野道を歩きながら、麥笛を拵へては吹き鳴らした。麥笛。田舎育ちの人は皆知つてゐよう、あの柔かな麥の莖を、二三寸の長さで切つて拵へた小さな笛。唾をつけて吹くと、單調な音

を出す小さな笛。私は好んでそれを吹いた。それを吹き吹き、長い野道の盡きるのも忘れて歩いた。私は今でもあの麥の莖の甘酸っぱい舌ざはりを、ありくと喚び起すことが出来る。その頃の私は、悲みをも喜びをも寂しさをも憧れをも、あの單調な麥笛のしらべの中に、自由に歌ひ出すことが出来たのだつた。

麥笛で思ひ出したが、まだ笛にすることが出来るまでに麥が大きくならないで、黒い土に飛白かすりの模様を置いて居る頃だから、勿論冬の中のことだが、私達はよく麥踏といふことをさせられたものだ。霜柱で根が抜け上るのを防ぐため

か  
友  
氏  
孫

加藤武雄自署



に、また、より強く伸びる力を刺戟するため、二三寸ぐらゐに生え上つた麥の芽を、わざと踏みつけてやるのだが、その麥踏の時、土の中から、栗の實だの、檜の實だのが、ころ／＼と足下に轉び出ることがあつた。こんな所にどうしてと不思議に思つて聞いて見ると、祖父は次のやうなことを話してくれた。それは、かけすが山からくはへて來て、そこへ埋めて置いたのだ。かけすはそれを埋める時、空にある雲を心覺えにして、その雲の下に埋めるのだが、その心覺えの雲は、すぐに動き去つたり消え失せたりする。可愛さうに、かけすの奴、せつかく埋めて置きながら、見附けることが出来ないのだ。

私は子供心に、心からかけすを憐んだことがあつた。それはたゞかけすばかりの悲みではないといふことを、二十年後の私はよく知つて居る。(我が小畫板)

三三 平和は成れり

近衛文麿

六月二十八日、朝來暖煙軽く揚りて、曉風爽かなり。市街は各國の國旗を以て美々しく飾られ、幾組となき行列「*Vive la France*」*Vive la France*」を唱へて、旗を振りつゝ、市中を練り歩き、自動車の如きもまた思ひ／＼に装を凝らしたり。憶へば、過去五箇年の間、砲彈の音に、敵機の襲來に、心膽を寒からしめしことそも幾度ぞ。今や乾坤一轉して、藹然たる瑞氣の搖曳

近衛文麿  
明治二十四年  
生、公使、講  
和全權委員  
六月二十八日  
市街  
の事、パリ  
の西南十一  
哩、人口四萬  
餘、  
ヴィヴ、ラ、  
フランス  
萬  
歳。



するを見る。<sup>〔巴里〕</sup>パリ人の今日の喜  
や實に想察するに餘りありとい  
ふべし。

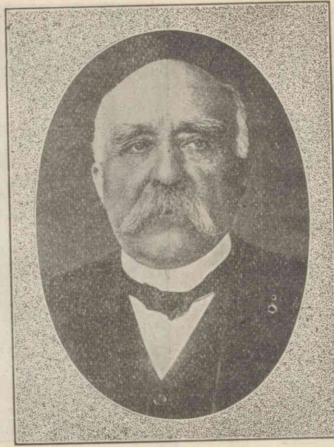
この日、<sup>Versailles</sup>ヴェルサイユ宮附近の混  
雑は名状すべからざるものあり  
しが、宮殿正門前の大通は帚目正  
しく掃き清められて、一切の通行  
を禁じたれば、一點の塵をも止め  
ず。○兩側に堵列せる共和衛兵の  
銀色の兜と白き鹿革の洋袴<sup>ズボン</sup>と黒  
く光れる長靴とは、光彩陸離とし



宮ニイサルエヴ

宮ヴェルサイユ  
市にある宮  
殿の建つた  
世の歴史も  
一の立派な  
殿といはれ  
る。

て莊重なるこの日の儀式を彌<sup>い</sup>が上にも莊重ならしめたり。



— ソンマレク



ンソルイウ

午後三時、各國全權委員は皆己に  
入場し、招待を受けたる人々及び  
新聞記者等もまた處狭<sup>せ</sup>きまでに  
詰めこみて、さしにも廣き鏡の間  
も些の餘地だになかりしが、今は  
近代の歴史に最も光輝ある儀式  
を前に控ふることとして、流石に咳  
一つ聞えず、滿場<sup>びき</sup>閑として靜まり  
返れり。  
見渡せば、庭園に面して置かれた



る卓子の中央には、クレマンソー氏例の如く椅子に深く腰を卸し、向つて左には、<sup>Clemenceau</sup> ウィルソン氏を始として米國委員、次にイタリー委員、その次に <sup>Wilson</sup> ベルギー委員あり。またク氏の



西園寺公望

向つて右には、<sup>Lloyd George</sup> ロイド、ジョージ氏を始として英本國委員、次に英植民地委員、次に我が日本委員西園寺公爵を始め、順次に居流れたり。何れも黒のフロックコート姿にて、華麗眼を欬てしむるものとは一も見當らざりき。更に眼を轉じて窓外を望めば、正面の有名なる噴水池の周圍には、共和衛兵圓陣をなして整列し、その背後には、特に今日

クレマンソー  
當時の佛國の  
首相。(1841  
—)  
ウィルソン  
當時の米國の  
大統領。(18  
59—1924)

ロイド、ジョー  
ジ  
當時の英國の  
首相。(1863  
—)

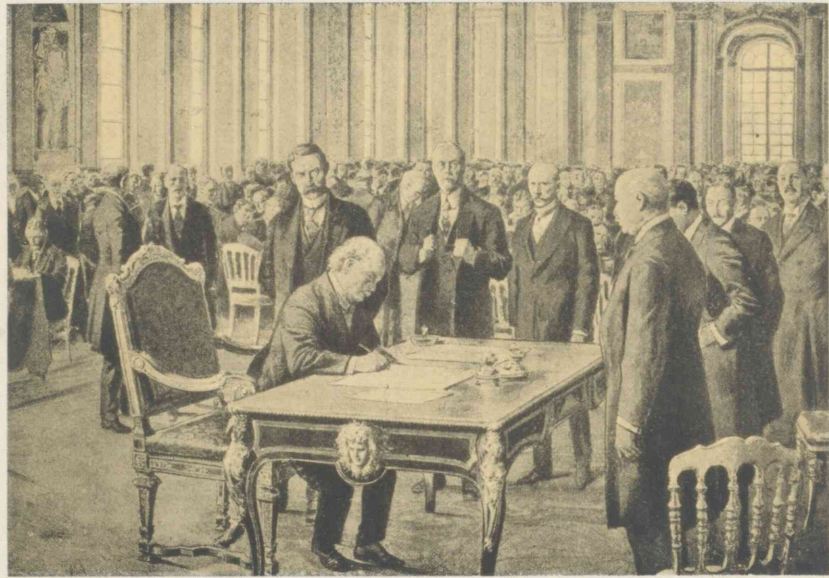
西園寺公爵  
名は公望、嘉  
永二年生。

に限りて庭園まで入るを許されし幾千の人々堵の如く並びて、調印の終るを今や遅しと待ち構へたり。午後三時を過ぐることに五分、向側の扉は開かれて、滿場の視線一時にその方に注がるゝや、やがて二名のドイツ委員は、幾多の佛國將校に見守られつゝ、入場し來れり。先なるは新外相 <sup>Muller</sup> ミュラー氏にして、後に續けるは <sup>Pain</sup> ベル氏なり。ともにフロックコートを着し、稍俯向がちに、極めて物靜かなる態を粧ひつゝ、日本委員の隣なる定め席に着けり。席定まるや、クレマンソー氏は徐ろに立ちて、まづドイツ委員より調印すべき旨を告ぐ。こゝに於て、ドイツ委員等はやら起ち上り、案内せらるゝまゝに、クレマンソー氏の直前、條

ミュラー  
(1876—)  
ベル  
當時の國務大臣。(1898—)



約の正文の置かれたる卓子の前まで歩を運べり。彼等は  
 平靜にして殆ど何等の痛痒をも感ぜざるが如き態度を以  
 て前に進み、代るく、條約の正文に署名したり。その間僅  
 僅二三分のみ。嗚呼、幾百萬の人命と幾千億の財貨を犠  
 牲として漸く贏ち得たる最後の結果はかくの如きか。ド  
 イツの運命はかくして定まり了んぬ。見よ、自席に歸り行  
 く二人の黒き姿の淋しくも憐れなるを。これを、かの五十  
 年前、同じこの大廣間に於て、<sup>William</sup>ウイリヤム老帝が、<sup>Bismarck</sup>ビスマルク  
<sup>Moltke</sup>モルトケを始め、雲の如き賢臣名將に圍まれつゝ、威風堂々  
 として四邊を壓倒したりし當時と對比し來れば、何人か心  
 中無限の感慨に打たれざらん。



ジョージ、ドイロるあ、つし名署に約條和講

帝 <sup>William</sup>ウイリヤム老  
 主 <sup>D1797-18</sup>ドイツの英  
 88) <sup>Bismarck</sup>ビスマルク  
 治家。1815—  
 1898) <sup>Moltke</sup>モルトケ  
 將 <sup>D1800-18</sup>ドイツの名  
 81) (18)



ドイツ委員の座に復するや、ウイルソン氏まづ座を起ち、四名の米國委員これに従ひ、同じ卓子に至りて署名せり。次にはロイド、ジョージ氏以下英本國委員、次に英植民地委員、次に佛國委員、次にイタリー委員、次に日本委員の順序にて、各一團づつ代るゝ、その卓子に於て署名し、かくて最後のウルグアイ委員に至るまで、時を費すこと四十三分、調印を了したる國々は、山東問題Uruguayに關する要求の容れられざりしを理由としてこれに加はらざりし支那を除き、凡べて二十六箇國、調印の全く終りしは午後三時四十九分なりき。こゝに於て、クレマンソー氏は肅然として起立し、莊重に而も簡單に宣言して曰く、平和は今や成れり」と。この時、世界

ウルグアイ  
南米東南部の  
共和國。  
山東問題  
日本がドイツ  
の租借權を繼  
承して經營し  
てゐる山東省  
の青島を支那  
に還附するこ  
とに關する問  
題。



に類なしと稱せらるゝヴェルサイユ宮庭園の大噴水は一  
齊に迸り出で、殷々たる百一發の祝砲は、宮殿の内外に蝟集  
せる幾十萬の人々の歡呼の聲と相應じて、新たなる世界の  
出現を祝しぬ。(戰後歐米見聞録)

新女子國語讀本 第二修正版 卷四終

□新制女子國語讀本□



大正十一年十月廿七日 印  
大正十二年一月四日 訂正再版印刷  
大正十三年九月十一日 修正三版印刷  
昭和二年九月二十三日 修正四版印刷  
昭和三年一月十一日 訂正五版印刷

著者

發行者

印刷者

大正十一年十月三十日 發  
大正十二年一月七日 訂正再版發行  
大正十三年九月十五日 修正三版發行  
昭和二年九月二十六日 修正四版發行  
昭和三年一月十四日 訂正五版發行

東京開成館編輯所

代表者 松本繁吉

東京市小石川區小日向水道町八十四番地  
株式會社 東京開成館

代表者 松本繁吉

東京市小石川區西江戶川町二十一番地  
佐々木俊一

發行所

東京市小石川區小日向水道町八十四番地

株式會社 東京開成館

(振替貯金口座) 東京第五三三三番

六...一卷 錢七拾六金各 價定  
十...七卷 錢參拾六金各

刷印社會式株刷印士富



